

書評論文: ニコラス・エヴァンズ『危機言語』

(大西正幸、長田俊樹、森若葉譯)

– 韓国版との比較 – \*

**Review: Japanese translation of *Dying Words***

**by Nicholas Evans**

**(Translated by M. Onishi, T. Osada and W. Mori)**

千田俊太郎

TIDA Syuntarô

1 はじめに

本評が対象とするのは以下書籍、主に日本版である。

Nicholas EVANS (2010) *Dying words: Endangered languages and what they have to tell us.*

Malden, MA: Wiley-Blackwell. 287 pp. ISBN: 978-0-631-3305-3.

ニコラス・エヴァンズ著、大西正幸・長田俊樹・森若葉訳 (2013)『危機言語 – 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』. 京都: 京都大学出版会. 505 pp. ISBN: 978-4-87698-209-7.

、  
が (2012)『  
』. : . 499 pp. ISBN: 978-89-93905-98-4.

以上の英語原著と日本と韓国におけるその翻譯について、場合により、[日]を日本版(日本語譯)、[韓]を韓国版(朝鮮語譯)、[原]を英語原著の略號として用ゐる。翻譯書籍としての

---

\* 本書評の一部は科学研究費補助金(代表者: 千田俊太郎、研究課題番號: 25284078)の研究成果である。韓国版『危機言語』の入手にあたり、後藤祐司さんの手を煩はせた。また金善美先生からは朝鮮語に關する多くの指摘をいただいて修正した部分がある。ここに記して謝意を表したい。勿論本評のありうべき誤りは全て筆者の責に歸するものである。本書評について初めにもちかけてくださった菊澤律子先生、書評を期待してくださり常に勵ましてくれながら馴れ合ひの嫌ひな評者とこの書評について連携しないことに文句も言はずに抛つておいてくださった長田俊樹先生にも感謝申し上げる。長田先生には偶然にも本評の参考文献の一部を直接いただいた経緯もある。

性格を捉へて論じるために、原著および韓国版をも引き合ひに出す。以下、§2では原著について、§3では原著、日本版、韓国版の形式的(装幀、編集デザイン、構成、その他)特徴について、そして、§4で翻譯の内容について、最後に§5では原著と譯書の緊張關係について論じる。§6は結語である。

## 2 原著について

危機言語(消滅の危機に瀕した言語)とは、そもそも言語學上の問題なのだろうか。言語が危機に陥るのは通常、言語集團が固有の言語を抛棄してゆく言語取替の過程で起こり、また固有の言語の抛棄には(結果として言語權の剥奪につながるやうな)社會的な要因があることがほとんどなのだから、これは一次的には社會問題であり、その根本的な意味での解決はある種の社會運動や政治によるしかない。そして、そのやうなことにコミットするのは言語學者の主たる任務ではない。

むしろ言語學者が危機言語を対象に行なふ仕事には、時に言語學者のエゴとも解釋されかねないものも含まれる。例へば危機言語に特有の構造變化に注目した研究といふのがあるが\*1、このやうな研究はある言語を危機に至らしめた社會問題を踏まへず行なはれてはならないだらう。一方で、健全な學術的好奇心が抑へつけられることがあつてもならない。言語が消滅する前に記録する仕事であつても多くの場合は使命感からなされてゐるものではないし、また話者に研究の要請を受けたやうなケースは少ないが、そのこと自體は問題視すべきではない。ただ、危機言語や少数言語にかかはつた者の多くは、その言語の狀況について社會的なことを含めて少しなりとも世に傳へてゆく責務を感じてゐる。

ところで、言語學者がなぜ言語に興味をもつてゐるのか、説明を求められるやうな時代がすでにやつてきてゐる。實は、その要求に答へることさへできれば、言語學者としての立場から危機言語の何が問題なのか示すことができる。例へば、本書に引かれたサピアの言を借りれば「言語科学が人間行動全般の解釈にとってどんな意味をもちうるか」(日本版 p70)を示すことが、危機言語を含む言語的問題を世の中と共有することにつながる。本評で取り上げる『危機言語』の英語原著、Nicholas Evans の *Dying words* はまさにそのやうな立場から、言語研究の魅力と價值を示しながら、危機言語の問題を取り上げたものである。そのため、本書に示された例は危機言語に限られてゐない。

---

\*1 Tsunoda (2006: 76)によると危機言語の構造變化についての論著は増えてゐる。この研究分野について Tsunoda は“Language death is no doubt one of the saddest and most painful aspects of human history[...]. Ironically, however, it provides excellent opportunities for research on the kind of issues that cannot be investigated in “normal” languages.”(Tsunoda 2006: 116)と云つてゐる。

## 2.1 言語の多様性と普遍性の議論のバランス

世の中と言語研究の価値についての視座を共有する形によつて危機言語の研究の重要性を強調する際にキーになることは、言語の多様性、個々の言語の特殊性と、その重要性を示すことである。そして、そのことは言語相対論よりの話を持ち出すことにもつながる。しかし、言語の多様性、特殊性、言語相対論に関する議論は、言語研究にとつて諸刃の剣ともなる。言語学は言語について語る言葉を提供するものである。言語学を知ることによつて、ある言語のことを知らない人にもその言語の構造を示すことができるようになるし、さうして示されたことは言語学を知つてゐる者なら理解できるはずである<sup>\*2</sup>。そのような意味での言語学は、言語の共通の基盤をさまざまな側面で假定しなければ不可能であると考へる。既存の言語学の用語體系が一つも使へないやうな言語の記述があつたとしたら、それはその記述が間違つてゐるか、言語学といふ學問分野が間違つてゐるか、どちらかではないだらうか。つまり、多様性を強調し過ぎたり個々の言語の特殊性を過度に際立たせたりすることは、言語学といふ學問分野や個々の記述を否定することにつながる危険性を持つてゐる。それゆゑ、言語学者は言語の多様性と言語一般が共有する基盤についてバランスよく議論してゆかなければならない。

言語一般が他の分野とどのやうな連携を取れるのかについて話題を擴げてゐることもあり當然ではあるが<sup>\*3</sup>、著者はこのことをよく意識してゐる。その意識は第2部冒頭の議論に最も直接に表現されてゐる<sup>\*4</sup>。そして、言語研究全般の基盤となる部分の追究のためにも多様な言語の在り方を知る必要がある、といふ論法で多彩な例示が行なはれる。例へばマツェス語の證據性について紹介した箇所、著者は「経験的な発見の多くがそうであるやうに、このような体系がありうることは事実が見つかつてはじめて明らかになる。」(〔日〕p137)と言つたあとに「[...] 社会的推論の認知モデルによつて、証拠性の判断が、単にタイプによつて分類されるだけでなく、時間の中にも位置づけられるやう、注意を払わなければならなくなつたのだ」(〔日〕p137)と付け加へてゐる。危機言語がテーマであることもあり、そのバランスは多様性・個別性の強調に傾きがちではあつても、誰にも納得のゆく表現である。言語研究の基盤には未熟な部分が多く残つてゐることを正しく認識しよう、そして一般論自體を改善してゆかうといふわけである。日本版に追加された自傳エッ

<sup>\*2</sup> 同様の議論は本書「言語学資料の表記について」にもある。

<sup>\*3</sup> 實は、「言葉」が言語学以外の分野でも役に立つ場合があるといふ議論も危険な賭けになる。話者コミュニティ以外の何かに役に立つたことを證明しなければ言語の価値は認められないだらうか。

<sup>\*4</sup> プロローグにも「良質の言語學的記述ができるかどうかは言語学者が問ひかける質問の枠組みがどのやうなものであるかにかかつてゐる」(〔日〕p7)とある。

セイの締め括りはそのことを(もう少し過激な形で)直接述べてゐる。

言語相対論について論じた章では「言語習得は確かに範疇化に影響を与えるが、それが世界全体を改変するものではない」([日]p301)と言つてをり、これもバランスの取れた発言の一つである。言語相対論が行き過ぎると、翻譯不可能性、それどころか人間同士の相互理解の不可能性といふ結論に達してしまふ<sup>\*5</sup>。このやうなバランス感覚は、Pinker (1994)に見られる言語普遍性への偏りや、逆に Everett (2009)に見られる個別言語の特殊性への偏りに比べて大いに共感できる。

また言語の多様性には當然強調されてしかるべき視點がある。ニューギニアの言語に關はつてみると、なぜニューギニアにはたくさんの言語があるのか、と問はれることがままある。評者はそのたびに大言語の成立には必ず明らかな背景があることを見よ、小言語がたくさんある状態がむしろ自然なはずだ、それは問ひの立て方が間違つてゐるのだ、「なぜある大言語が成立したのか」こそ問はれるべきことなのだ、と返してきた(Tida 2006)。本書([日]p24)には全く同じ觀點が示されてをり、大いに意を得た。

以上に示した原著者の態度は、特定の少數言語・危機言語の記述の取り組みから自然と決まつてきたものだらう。日本版にのみ加へられた自傳エッセイからそのことが分かる。例へば、エッセイでは特定言語の記述をするためにも既存の言語學的成果を知ることが重要であるといふ考へが示されてゐる<sup>\*6</sup>。原著者は特定言語の記述に取り組む過程で別の言語の知識を得、また言語一般に關する知見を深めていつたに違ひない。そして「言語内部の、あるいは通言語的な意味の私たちの探究は、もっと一般的には人生における意味の探究と密接に關連している」([日]p424)と言ふ時、自傳に示された原著者の人生はまさに本書の内容に重なつて見える。

## 2.2 議論のバランスの崩れ

これまで述べたやうに、全體に議論のバランスはよいが、いくつかそのバランスが崩れてゐるところもある。例へば、「すべての言語が少なくとも名詞と動詞を区別するかどうかという問題にさえ、まだ評決が下つていない。」([日]p87)といふ發言は、この著者が日本版の翻譯者の一人と共著した論文である Evans and Osada (2005)での發言に照らすと、相當に言語多様性の強調に舵を切つた言ひ方ではないだらうか。Evans and Osada (2005)では名詞と動詞の區別がないとする研究者もゐるムンダ語について、明らかにこの區別があると

<sup>\*5</sup> 本書では [日]p107 もこの問題について觸れてゐる。

<sup>\*6</sup> 例へば「私がうまくとらえることができない言語現象があるとき、知るかぎりの言語に見出される、同様の現象について読み、問題の所在がどこにあるのか、また他の言語学者がその問題をいかに扱っているかを知らうとする」([日]p418)といふ發言がある。

主張し、さらには、今のところ名詞と動詞の区別がないとされてきた言語の中に、そのことがきちんと示されたためしはないとまで言っている\*7。そのことを踏まへると、本著は多様性を強調するあまり、ここでは政治的に言葉を選んであるやうにもみえる。

逆に、バランスを取らうとしたあまり、言語の個性を過小評価した説に加担してしまつた部分もあるやうに思ふ。例へば「雪を指すいくつかのエスキモーの単語」([日]p275)を行き過ぎた言語相対論の事例としてさらりと取り上げてゐる。原註に「エスキモー語が、何十もの、あるいは場合によっては 100 を越える、雪を表す単語をもっているという、人口に膾炙した偏見は、文化人類学者のマーティン (Martin 1986) によってたちどころに打ち砕かれ、最近ではプラム (Pullum 1999) によって風刺されている」([日]p310) としてゐる。

Martin (1986) は、「エスキモー語に雪を表す語がたくさんある」といふ言説が増幅されながら拡散された過程 (傳説化) を示した論文であるが、「傳説化」の發端となつたといふボアズが実際に把握してゐた内容やエスキモー諸語の事實には関心がなかつたやうである\*8。読み比べれば一目瞭然であるが、Pullum (1989) はほとんど Martin (1986) だけを参照した二番煎じのエッセイである\*9。その本文はどこまでがマーティンの成果でどこが自分のささやかな追加なのかを明示してゐない部分も多く、ウィットに富む強い調子で「エスキモー語には雪を表す語はたくさんない」といふ説を展開する、つまりは逆の内容の傳説化を始めたものである。Pullum (1989: 278-279) の發言、大まかには「エスキモーの雪についての話は知的關心を持つに値しない」だとか「せいぜい馬の育種家が馬に関する用語をたくさん知つてゐるとか印刷業者が活字體の名前をたくさん知つてゐるといふやうなことに比すべきものだ」とするのは、一般的に言語相対論的な考察にあたつて十分に考へるべき視點を示してはゐるものの、この特定の事實に關して言へば根據のない揶揄に過ぎない。この表現は Pinker (1994) にそのまま引用されることでさらに廣まつてしまつた\*10。以上は

---

\*7 該當部分を示しておく: “[T]hough it is clear that in many languages there is only a “weak” noun-verb distinction, we do not believe there exist – as yet – attested cases of languages lacking a noun-verb distinction altogether, according to the highest standards of description and argumentation.” (Evans & Osada 2005: 384)

Evans and Levinson (2009) ではムンダ語の分析については主張を維持してゐるものの、名詞と動詞の区別が全ての言語に見られる可能性に關する主張からの撤退がすでに見られる。

\*8 Krupnik and Müller-Wille (2010) は、マーティンがデマの發端と考へるボアズの雪關聯語彙の例示 (四形式) がボアズのエスキモー語の知識の全てではなかつたこと、実際には相當な数の氷・雪關聯の語彙を調査してゐたことを明らかにしてゐる。この論文には複数のエスキモー語の事實が豊富に例示されてをり、ボアズの調査はさておいても、エスキモー諸語の雪關聯語彙は派生形式を除いて 20~35 あるとしてゐる。

\*9 原著者の引用した Pullum (1999) はそのエッセイを収めるエッセイ集である。

\*10 マーティンにとつて皮肉な結果であり、今となつてはこの言説を巷で耳にしたらプラムからの受け売り (孫引き) なのか、ピンカーからの曾孫引きなのか、注意しなければならない。プラムのエッセイはのちに問題のエッセイと同じ題名の本にまとめられてゐるが、邦譯はない一方、Pinker (1994) には邦譯がある。日本では曾孫引きが相當數にのぼるやうに思ふ。なほ、Pinker (1994) の邦譯はマーティンが意圖的に使用し

どれもエスキモー語の専門家の発言ではないことに注意されたい。ミイラ取りのミイラにならぬためには、立ちもどつて専門家の話に耳を傾ける必要がある。

上の議論とは獨立に書かれた宮岡 (1987: 154-155) によれば、エスキモー語には雪一般を表はすことばは見当たらず、辞典には「語幹がべつの、したがってたがいに音形上の似かよりがまったくない名称」だけでも 20 以上があり、さらに派生語がある \*11。その組み合わせの全てが日常的に使はれるわけではなからうが、「雪」一般を表はす語彙がないのならば、雪を表現するたびに適切などれかを選ぶことになることは想像にかたくない。Kaplan (2003) は専門家の立場からマーティンやプラムの発言に反論してをり、やはりエスキモー語の一つ、Kobuk Iñupiaq について、雪や氷を表はす語彙が非常に多いことを示してゐる。これに關する論争を辿るとエスキモー語の専門家 (完全に一枚岩ではないやうであるが) は、エスキモー語が氷・雪に關する語彙を豊富にもつてゐることについて、今更取り立てて述べることもない、当たり前的事实と考へる傾向にあつたやうだ \*12。プラムの喧傳が世に根を下ろし始めて、エスキモー語研究者たちもやうやく重い腰を上げたのだらう。Krupnik and Müller-Wille (2010) などはマーティンやプラムに對する専門家からの現在最も決定的な反駁と思はれる。『危機言語』の著者が専門家の発言を参照してゐたら、昔の「エスキモー傳説」と逆の内容をもつエスキモー傳説に加擔してゐたかどうか疑問に思ふ。少なくともこの著者にしてプラムの発言「知的關心を持つに値しない」には賛同しないものと信ずる。原著者のこの章における議論にとつてむしろ朗報に違ひないからである。

---

ラムが引き繼いだ表現「エスキモー」を、イヌイットと置き換へてしまつてゐる。

\*11 現在この本は入手が難しいので該當部分を示しておきたい。

奇妙なことに思えるかもしれないが、日本語の「雪」とか英語の snow にあたることばはエスキモー語には存在しない。これは、意味が中性的で純粹に「雪(一般)」をあらわすことばは見当たらないということである。カナダのエスキモー語諸方言にかんしてもっとも詳しい辞典のひとつである L・シュナイデール (Schneider) 師の『フランス語=エスキモー語辞典』(ケベック、1970 年) では、「雪」の項に二十以上の名称があがっている。北極圏外である南西アラスカのユピック語でも、すくなくとも十六種の名称が知られている。それらは、雪の性質や用途によつてことなる、さまざまな雪をあらわすことばである。

...

シュナイデール師のあげている二十数種とかユピック語の十六種の名称というのは、語幹がべつの、したがってたがいに音形上の似かよりがまったくない名称だけについてなのである。日本語の「細雪、牡丹雪……」が「雪(一般)」の亜種、いわば「二次的な雪」であるのとは根本的にちがっている。エスキモー語でも、ある種の「雪」をあらわす語幹に接尾辞をつけた派生語—その種の「雪」にかんする「二次的な雪」—もつくれるわけで、それらをふくめると、とても二十数種ではすまない。(宮岡 1987: 154-155)

\*12 マーティンやプラムへの専門家からの反應が少ないことについて Kaplan (2003: 251) は “With the exception of Pullum’s appendix, Eskimo linguists have ignored this subject, probably seeing it unworthy of any serious attention.” といふ。また “Linguists and others familiar with these languages have always taken it granted that there is extensive vocabulary for the areas in question” (Kaplan 2003: 251) と議論を締め括つてゐる。

### 3 形式的側面

ここでは 1. 装幀、ページデザインなど、2. 構成、3. 翻譯版序文、4. 卷頭資料、5. 地圖 6. 索引、7. 註、8. エピグラフなどについて原著と日韓の兩譯書とを比較しながら述べる。

#### 3.1 装幀、ページデザインなど

英語原著は Nicholas Evans の *Dying words* で、Wiley-Blackwell より 2010 年に出版された。扉や書誌情報+目次+謝辭+プロローグ等 22 頁 (ローマ数字の頁番號)、本文+索引 287 頁 (算用数字の頁番號) で總 309 頁、ソフトカバーで、カバーは水色を背景にしてアボリジニーの繪と思はれるデザインが配置されてゐる。Amazon.com では 2015-02-21 現在 33.38 米ドルで賣られてゐる。原著では見開き左頁のヘッダに部の名前が、右頁のヘッダに章の名前が入つてゐる。部冒頭の導入の文章では左右の頁兩方に部の名前が入つてゐる。部や章の番號は入つてゐない。ヘッダの外側にノンブルがある。解題でも指摘されてゐるが、表題だけでは何が書かれてゐるのか分かりにくく、各部・章は獨立してゐるため、柱に章の番號がないと、讀者は自分の讀み進めたことを見失つてしまふ。

日本版は大西正幸、長田俊樹、森若葉によつて譯された。評者の手元にあるのは 2013 年 2 月 25 日に初版第一刷發行されたものである。出版社は京都大学学術出版会で、口繪 4 頁 (ノンブルなし)、目次 2 頁 (ノンブルなし)、序文等 16 頁 (ローマ数字の頁番號)、本文+索引 505 頁 (算用数字の頁番號)、總 527 頁、値段は本體 5,200 圓 (税別) である。カバーは赤を基調にしてをり、その表には十章の扉頁 (p355) と同じ寫眞をカラーで中央に配してゐる。カバーの折り返し (袖) には装幀などの情報がある。各部には扉頁があり、部の題名と日本版で追加された寫眞、その説明がある。部冒頭の文章には頁の左側に縦線が入つてをり、讀者は自分が今どこにゐるのか分かる。各章にも扉頁があり、部と同様章の題名と日本版で追加された寫眞、その説明がある。部と章の扉頁のデザインはよく似てゐるが部の題名の方が活字が大きい。1 頁は 36 字× 31 行で單純計算は 1116 字になる。見開き左頁のヘッダに部の番號と名前が、右頁のヘッダに章の番號と名前が入つてゐる。ヘッダにはグラデーションのついた線狀の背景がデザインされてをり、外側にノンブルがある。部冒頭の導入の文章ではヘッダはないが、それ以外の頁には部や章の番號が入れてあり原著より分かりやすい。

、 によつて譯された、韓國版には 2012 年 5 月 28 日印刷、2012 年 6 月 4 日發行とある。出版社は で、頁番號 (算用数字) は口繪やタイトルページなどを含めた通し番號になつてをり、總 499 頁、ハードカバー、値段は 23,000 ウォンである。黒

を基調にしたカバーに写真があるが、原著にある写真ではないようだ。カバー裏には Roly Sussex、Lindsay J. Whaley、David Harmon、Daniel Hieber の四人の評がならぶ。表のカバー袖には著者紹介と譯者紹介があり、裏のカバー袖にはこの出版社の別の本の宣伝がある。原著や日本版と異なり栞紐(スピン)が付いてゐる。本文デザインはかなり凝つてゐる。各部の始まりは見開きの扉頁があり、バックに黒を基調とした白抜きの文字が映える。左面にエピグラフがあり、右面にはうつすらとヒエログリフ、そして弓矢を持つた人物像が描かれた背景に、部の題などを据ゑる。それをめくると部冒頭の文章は背景が薄い灰色である。各章の始まりにも扉頁があり、その全體が灰色の太枠に囲まれてゐる。章の題とエピグラフが示されてゐる。部や章の始まりの頁に濃い色が付いてゐるので本を閉ぢてゐても區切れ目が分かる。また部と章の扉頁・本文のデザインが大きく違ふのも分かりやすい。朝鮮語は分かち書きをするので正確ではないが、スペースの部分をカウントすると 36 字程度程度の横幅があり、30 字強の文字が埋まつてゐる。28 行なので 30 × 28 で 1 頁 840 字程度である。1 頁見開き左頁のフッタに本の題名が、右頁のフッタに章の番號と名前が入つてゐる。部冒頭の導入の文章では右頁のフッタは部の番號とフッタが示されてゐる。右頁のフッタは良いが、左頁のフッタは必要ないやうにも思はれる。

總頁數で分かるやうに、原著に比べ日韓兩譯書は一見して厚い。日本版の場合、あとで述べるやうに内容自體大幅に増えてゐるが、韓國版の場合はそれほど内容の追加がないのだから、この厚さは別の要因による。まづ、韓國版は 1 頁あたりの字數が少ない。それだけではなく例へば写真などの圖版資料は、原著や日本版では小さく示され本文に回り込みさせてたりしてゐるが、韓國版では多くが基本的に 1 ページをまるごと占める形である。部や章の始まりにもふんだんにスペースが取られてゐる。また後述するやうに原語の提示も非常に多い。このやうなことが積み重なり本の厚みが増してゐるものと思はれる。

価格は日本版が高い。言語學の翻譯書としてよく賣れてゐるスティーブ・ピンカーの『言語を生み出す本能』(NHK ブックス) 上下は本體 1,280 圓\*2 で 2,560 圓、ここまで安くできなくてもダニエル・エヴェレットの『ピダハン』(みすず)は本體 3,400 圓で、もう少し頑張れなかつたか、残念に思ふ。この二つを引き合ひに出すのは、§2 で觸れた通り、言語の共通基盤と特殊性の取り扱ひについて本書と異なる立場をもち、日本語譯がそれなりに賣れてゐると考へられるからである。韓國では本が一般に安く、このやうな本がこの價格で賣れる状況は羨ましい限りである。

日韓兩譯書には帯がついてゐる。[日]の帯は黒で、背にはキャッチフレーズ「脆弱な少数言語から学ぶもの」、表には「言語の消滅によって、人類は何を失うのだろうか」などのキャッチフレーズがあり、裏には大枠の構成(目次と書いてあるが頁番號はない)が示され



てゐる。[韓]の帯は茶色で、表には黄色の字で The Times Literary Supplement に載つた評、裏にはエピローグからの抜萃が白抜き文字で記されてゐる。

### 3.2 構成

まづ原著の章立てとテーマはプロローグ、1. 言語多様性、2. 言語の記録、3. 非典型的言語特徴、4. 範疇化の多様性、5. 比較言語学、6. 言葉と事物の歴史、7. 文字の解讀、8. 言語相對論、9. 文學、10. 言語の危機、エピローグとまとめることができる。お洒落なタイトルが付けられたこれらの章は五つの部に整理され、各部には導入言がある。原著のより詳しい内容的構成と展開は日本版の譯者解題や大角(2013)を参照されたい。

原著に比べ、日本版は追加がいろいろされてゐる。1. 巻頭カラー資料(本の扉の後)、2. 日本語版序文(目次の後)、3. 第8章のセクション「虹の縞を描く」、4. 自傳エッセイ「言語学者になることもなく」(本文の後)、5. 大西正幸による譯者解題(自傳エッセイの後)、6. 長田俊樹によるあとがき(巻末地圖の後)、7. 各部・各章の扉ページと扉用の寫眞及び寫眞説明、8. 譯註があり、最後に奥付けの前に翻譯者紹介がある。「さらに読み進めるには」では原著通り主に英語の本を紹介してゐるが、日本語譯で讀める本については本書の参考文献表には邦譯文献の情報を盛り込んであり、たいへん便利である。譯者解題の「補遺」(p438-439)でも日本語で讀める文献を別途紹介してゐる。削除された部分として謝辭の後半“Publishing and Copyright Acknowledgments”がある。日本版における構成變更は、1. 「言語学資料の表記について」が原著ではプロローグの後だが、前に配置してゐること、2. 原著ではエピローグの後にあつた註が各章末に再配置されてゐること、に氣が付いた。

韓國版での追加部分は1. 巻頭カラー資料(本の扉ページより前)、2. 凡例、3. 朝鮮語版序文、4. 各部・各章の扉ページとデザイン、5. 譯註である。謝辭の後半“Publishing and Copyright Acknowledgments”は日本版と同様削除されてゐる。韓國版における變更點は1. 謝辭の内容、2. 原著ではエピローグの後にあつた註が各章末に再配置されてゐること、3. 原著では各章末にある Further reading がエピローグの後にまとめて再配置されてゐること、4. 謝辭が Further reading の更に後に移されてゐること、である。

日本版の追加内容について簡単に觸れておく。自傳エッセイの追加は有意義であつた。§2.1で述べたやうに原著者の生き方と本書の内容との關係がうまく重なり合つてゐる。「虹の縞を描く」は出版の都合で原著で削られたものだつた。譯者解題は、本書の見通しをよくしてくれてをり、また本書の位置付けを明らかにしてくれてゐる。あとがきは、本書の内容からは知り得ない原著者の裏話、翻譯の裏話に加へられてをり、實に楽しい。

### 3.3 翻譯版序文、翻譯者の顔

日本版の日本語版序文で原著者は、翻譯者のうち大西正幸と長田俊樹と古くからの友人であること、廣く正確な學識をもつた森若葉とはこの翻譯を通じて會つたこと、そして、2年間の間に6回ほど直接會つて翻譯に關する打ち合せをもつたことに觸れてゐる。「あとがき」と翻譯者紹介に翻譯の擔當箇所が明示されてゐる。日本版で追加された扉寫眞を辿つてゆくと、翻譯者全員の顔(文字通り)を見付けることができる。若干出たがりの翻譯者たちであるが、原著者の提案もあつたことが「あとがき」に述べられてゐる。翻譯の過程、責任や原著者との連携を見て取ることができる。

韓國版では翻譯の途中でキム・キヒョク(第一翻譯者)が亡くなつてをり、その後の作業は全てホ・ジョンウンが行なつたことが、朝鮮語版序文や翻譯者紹介から分かる。韓國版の獻辭は「故 (1955~2011) 」(この本を故キム・キヒョク先生(1955-2011)に捧げます)となつてゐる。朝鮮語版序文は、原著者がキム・キヒョクと出逢つたのが2010年12月、ドキュメンタリー番組の顧問として來豪した際だつたこと、すぐに翻譯したい旨の申し出があつたこと、その意志と情熱に深い感銘を受けたこと、訃報に接した悲しみについて述べる。翻譯者紹介の情報から、上の番組は2011年放映の「KBS 〈 〉(KBS開局特集ドキュメンタリー〈消えた言語 忘れられた世界〉)であること、亡くなつたのが2011年4月だつたことが分かる。翻譯過程、擔當などについては觸れてをらず、あまり顔の見えない裏役に徹してゐる。

日本語版序文は上記の通り、翻譯に關する楽しい過程や翻譯者との個人的な關係を述べてゐるほか、英語話者を對象にした本を翻譯することによる視點の逆轉などについて述べ、また日本の研究者たちの少數言語への取り組みにも言及、更に本書に關聯する日本語による著作も紹介してくれてゐる。それに對し、朝鮮語版序文は、上に示したやうに翻譯者との關係に觸れてゐるほかは、言語多様性の崩壞の危機を熱く語り、より多くの韓國の言語學者が言語多様性に關心をもつやうになつてほしいことなどを、韓國の事情に照らして述べてゐる。このやうに、日韓の翻譯版序文に最も分かりやすく見て取れるのが、兩譯書の全體の印象の明暗のコントラストである。日韓の翻譯版序文は内容も異なるが、日本版にはエピグラフが付けられてをり、韓國版にはないといふ形式における違ひもある。

### 3.4 卷頭資料・寫眞

原著にはないが日韓兩譯書に見られるのが卷頭資料・寫眞で、原著では白黒で本文に散りばめられた資料・寫眞のいくつかを兩譯書で卷頭にカラーで載せたものである。

日本版では4頁にわたりカラーの「口繪」が11點ある。それぞれにキャプションがついてをり、参照すべき章と頁番號が入つてゐる。また本文でも口繪番號の参照がある。「あとがき」によると「カラー写真掲載が京都大学学術出版会の御好意で可能となつた」のさうだ。

韓國版では1頁に1點の人物寫眞が7頁にわたつて掲載されてゐる(合計7點)。すべて人物寫眞で口繪6が白黒、それ以外はカラーである。キャプションとそれぞれ2行づつの説明がついてゐるが、参照すべき本文の位置は示されてゐない。その代はり、本文でも白黒で寫眞が載せてある。本文に巻頭寫眞への参照がないがないので活用されにくくないか、心配になる。例へば Tim Mamitba に言及する際、一章では「圖 1.2 参照」(p42)、エピソード註2では「第1章の寫眞参照」(p448)と、本文中の白黒寫眞に言及してゐる。その際、カラーの口繪3に参照がされてゐないだけでなく、参照された白黒寫眞の頁番號(圖 1.2 は p44)に觸れてゐない。

全般的に言へることでもあるが、日本版は相互参照が丁寧だといふ特徴があり、韓國版はスペースの使ひ方が贅澤だといふ特徴がある。原著と日韓兩譯書の口繪對照表を附録 B に擧げた。日韓で4點、資料が重なつてゐるのは原著者の意向かもしれない。

### 3.5 地圖

地圖の内容は原著も日韓兩譯書もあまり大差ないのだが、その形式的な扱ひは異なる。まづ、巻末地圖の位置づけについて確認しておきたい。巻末地圖四つは、情報としては表 1 に示した地圖を補ふ關係にある。

	原著	日本版	韓國版
アーネムランド北西部	Figure 1.2 (p7)	圖 1.1 (p21)	圖 1.1 (p43)
アルギック諸語	Figure 5.4 (p98)	圖 5.4 (p173)	圖 5.4 (p211)
アフロ=アジア諸語	Figure 5.6 (p100)	圖 5.6 (p176)	圖 5.6 (p215)
オーストロネシア語族の諸言語	Figure 6.2 (p114)	圖 6.2 (p200)	圖 6.2 (p239)
シベリア・北アメリカ	Figure 6.5 (p122)	圖 6.5 (p212)	圖 6.5 (p251)
カフカース	Figure 7.5 (p139)	圖 7.5 (p240)	圖 7.5 (p281)
ミヘ=ソケ諸語	Figure 7.10 (p146)	圖 7.10 (p250)	圖 7.10 (p294)
アーネムランド西部	Figure 9.1 (p184)	圖 9.1 (p316)	圖 9.1 (p359)

表 1 本文に現れる地圖

巻末地図のみを見ると、これが本書で言及された世界の言語を網羅するものであるやうに見えるが、さうではない。例へば「オセアニア」の地図として示されてゐるものにはポリネシアとミクロネシアが含まれてゐない。それに關聯するが、Malagasy, Tagalog, Cebuano など、巻末地図のどれかに位置を示せる言語も該當位置に示されてゐない。これらは Figure 6.2 に本文で言及済みだといふ扱ひになつてゐるやうである。同様にアフリカ・中近東の言語のうち Hausa, Hebrew, Amharic などは Figure 5.6 には示してあるが、巻末地図にはない。類例はたくさんある。さうすると、「言語学資料の表記について」の末尾に述べられてゐる通り、「この本で言及されている言語の大部分は、少なくとも 1 つの地図によつて、その位置がわかるようにしてある。」([日]p.xvi) といふ約束を守るための補充が巻末地図だといふことになる。巻末地図の位置づけは、「本文では地図を示せなかつた諸言語」の地図なのである。この相補はれるべき關係は原著の編集段階で意識されてゐる。言語名索引において斜體の數字が地図参照頁として他の頁番號と區別されてをり、そこを辿ると實際、原則一つの言語につき一度しか斜體の参照頁はない。ただし Figure 1.2 と Figure 9.1 の二つは大きく重なる地域の地図であり、これらの地図に關連する言語のほとんどが兩方の地図に載つてゐる \*13。

ところで、これも「言語学資料の表記について」に觸れられてゐる通り、「それぞれの国の公用語で、その位置がよく知られているか、その国の位置が簡単にわかる場合」([日]p.xvi) などは例外であり、どの地図にも示されてゐない場合がある。最も大きな抜けはヨーロッパの諸言語である。「アジア」の地図にアイヌ語があつて日本語、朝鮮語が示されてゐないことにも納得しさうになる。ところが、話者人口の大きく公用語の地位のある北京官話、ヒンディー語、ベンガル語は示されてゐる。原著、日韓兩譯書、みな同じ扱ひであるが、検討してもよかつたかもしれない。

原著の巻末地図 (p270-273) にはいくつか問題點があつたやうに思ふ。まづ、頁の通し番號として數へられてゐるにも拘らず、ノンブルが振られてゐない。また、下のキャプションに“Languages of Europe and Africa: Location Map” などとあるのは、巻末地図の補充的役割を思へば若干ミスリーディングである。そして、巻末地図には参照用の番號がついてゐない。本文で参照されてゐないからだらうか。

巻末地図のうち p271 と p273 は横長の圖を左に 90 度回轉させて配置してある (頁の天の方向が東)。回轉自體には問題はなく、これらの地図では地図内外の文字の向きもそれに合はせてある (キャプション位置は頁の右方向) ので、本を右に 90 度回轉させて見れば良い。これはノンブルがないことと關係あるかもしれない。

\*13 そのうち [原] の Iwaidja には斜體の参照頁が 7 と 18 の二つあるが、18 は 184 の誤りである。

日本版では巻末地図 (p468-471) は他の頁と同様にノンブルが振られてをり、キャプション位置は頁の天地に合はせて下に揃へられてゐる。キャプションには「巻末地図-1」のやうに参照用の番號が入つてゐる。本文での参照は見かけなかつたが、それでも番號があるのはよいと思ふ。ただ、原著のキャプションにあつた、それぞれの地図の表はす地域の名前がない。これには少々違和感を感じる。地域の名前は残しておいた方がよかつたのではないか<sup>\*14</sup>。もう一つ、日本版の地図について腑に落ちないことがある。地図の向きは、圖自體はすべて原著と同じだが、p469 のアジア地図 (頁の天の方向が東) のみ地図内の文字が全て頁の天地に合はせられてゐる。コピーライト表示を含めて周到に文字の向きが原著と異なるので、意圖的な處理であらうが、讀者は東を天にした地図を見ることになり、あまり便はよくないし、一貫性もない。p471 の「オセアニア」地図は原著と同じく地図 (頁の天の方向が東) と一緒に文字を回轉させてあるのである。

韓國版においては巻末地図 (p486-489) の冒頭に「  
」(各大陸の言語地圖, p486) とある。この點がまづ原著や日本版と違ふ。良い側面と悪い側面がある。まづ、英語版や日本版のやうに導入の文句が何もない唐突な資料提示に比べれば親切であるから、その形式は一つの方針として良い。ただし、上で繰り返して述べた通り、巻末地圖は補充資料であり、本文で言及した言語を網羅するものではないから、誤解を招く導入文句だともいへ、文句の内容は良くない。それぞれの地図のキャプションには「  
1

」(地圖 1 ヨーロッパとアフリカの言語地圖, p486) のやうに参照用の番號と地域名が明示されてゐる。これも韓國版のよいところである。韓國版で唯一理解できない處理は、地圖のコピーライト表示を全て削除してしまつてゐる點である。なほ、他の頁と同様ノンブルと柱は常に下方に配置されてゐる一方、地圖内外の文字とキャプション位置は原著と同じ扱ひで、横長の地圖は左に 90 度回轉してゐる。

### 3.6 索引

原著には二種類の索引: Index of Languages and Language Families と Index がついてゐるのに對し、日本版では新たな索引を作つてをり、1. 「一般事項」、2. 「言語・文字名」、3. 「国名、地名、民族名」、4. 「人名」の四種類に分けてゐる。一方韓國版では一般索引がなく、「言語及び語族名」と「人名」の索引のみに減らしてゐる。

日本版では索引の分量も増えてゐる。例へば音節に關する項目について原著・翻譯を對照して示す。

<sup>\*14</sup> 想像を逞しうすれば、譯者は議論の末、地圖の補足的な役割を考へて、地域の名稱を削除してしまつたのかもしれない。

■原著

syllabic scripts 148-9, 151  
 syllables 54-5, 132, 148-50

■日本版

音節 97, 319  
 音節境界 98  
 音節初頭子音 97  
 音節末子音 97  
 音節文字 253  
 音節文字表 255

日本語版がたいへん親切であることは疑ふ餘地がないが、若干細かく増やしすぎた感がなきにしもあらずで、上記項目では「音節境界」を下位項目に挙げる必要があつたか、「音節文字」と「音節文字表」は別の項目にすべきか、疑問が残る。上位項目と下位項目の参照頁に「97」が集中してゐるのもあまり効率がよくない。

「言語・文字名」索引と「國名、地名、民族名」索引を分けてゐるのはむしろあまりよくなかつたのではないか。例へば「ラディル語 324, 343」は前者に、「ラディル 186」は後者に入れられてをり、参照頁が大きく違ふ。「ラディル(語)」のキーワードで索引を調べたい場合、この二つが索引項目としてならんでゐないのは個人的には不便であると感じる。原著や韓国版ではみな言語名索引に含められてゐるのでこの問題は生じない。なほ、民族名が本文に出て来るものは、p186の「ラディル」を含めて言語の話題に及んでゐる。同様のことは「アパッチ語 163」「アパッチ 211」、「ポーランド語 215, 220」「ポーランド人 57」その他多くの項目について言へる。

「人名」かどうかの分類も問題になる。「インドラ神」、「オデュッセウス」は一般事項の索引に分類されてゐるが、「アブラハム \*15」は人名の索引にある。そして一般事項の「サピア=ウォーフ仮説」に出てくる参照頁は、人名の「サピア (Edward Sapir)」の項目では町寧に排除されてゐる。

索引項目の選定はたいへん難しい。「言語・文字名」にならんでゐる「スー語族 194」、「スー諸語 194」、「スー祖語 195」は少ししつこい感じもする。原著の言語名索引では“Siouan 110”のみであり、韓国版でも「 233」一項目である。逆に原著には“enculturation”が索引項目に立つてゐるが、日本版には見当たらない。

原著にあり、日本版で一貫して意圖的に削除された参照として地圖への参照がある。この判断は評者も一應納得する。原著の言語名索引の巻末地圖への参照を利用する際、まづ

\*15 原著者の作つたと思はれる譬へ話に出てくる人物なので、嚴密に聖書のアブラハムではない。

戸惑ふのはノンブルが振られてゐないことである。また地圖に行き当たつても、それは索引から参照したい情報ではなかつた。ただ、原著や韓国版と同じく地圖への参照を斜體にして残す方法もあつた。上の例もさうだが、索引は、キーワードを全て機械的に収集して作る必要はない。しかし、いくつか気になる参照の抜けがある<sup>\*16</sup>。原著も日韓兩譯書も、索引項目と参照頁の選擇についての方針は見えにくい。

### 3.7 註について

日本版は原著の註を二種類に分けた上に譯註を加へ、三種の註に分類し直してゐる。それぞれ右片括弧つきの數字(以下右片括弧註)、「原註」として數字、「訳註」として數字で示されてゐる。原著では註は全て巻末に寄せられてゐるが、日本版では註の内容は各章の終わりに種類別に配列されてゐる。原註の中に譯者の加へた情報がある場合、譯者による追加情報である旨をなるべく明示する方針を取つてゐる。例へば「(訳者)」([日]p260 原註10)、「(日本語訳は、大西による、英訳からの重訳)」([日]p309 原註1)のやうな括弧書きがそれにあたる。譯者による追加情報であることを明示せず單に括弧書きを加へるだけですませてあるものもある。例へば「オウィディウス (Publius Ovidius Naso 前43-後17(18))」([日]p56)、「tima <グリドル(フライパンの1種)>」([日]p193)のやうなもので、人物の生歿年を本文に加へてゐる場合が多い。日本版の譯註で目立つのは動植物の情報である。

日本版の右片括弧註は引用文献の提示に使はれてをり、原著のエピグラフの典據、註の一部、翻譯で追加されたものなどが含まれる。原著では文献提示のみの註も多く、註を辿つても期待外れといふことがあるので細かい配慮をしてゐるともいへなくもない。文献情報の参照が必要なれば右片括弧註を無視すればよい。しかし、さらに原註と譯註が分けられてゐる。原註と譯註が同じ箇所につけられてゐたりすると、探すのに手間がかかる。このやうに、細かく分けられてゐるがために生じる疑問がほかにもある。例へば、分類の基準もよく分からないものがある<sup>\*17</sup>。右片括弧註では原著の註の内容に加へ譯者による邦譯文献の提示が混ざつてゐるのに、その他の註では原註と譯註をわざわざ分けてゐるが、これは一貫した方針かどうか言へるだらうか。第7章の原註4は原著では本文(セクションのエピグラフの参照情報括弧内)の情報を註に回したものであるが、「原註」といへるだらうか。あまり嚴密に分類せず、原註と譯註、あるいは註と右片括弧註など二本立てにす

<sup>\*16</sup> 本文で示したものと關聯する脱落を指摘しておく。日本版では「音節」(p53, p250, p254)、「音節頭子音」(=音節初頭子音, p53)、「音節を閉じる子音(コーダ)」(=音節末子音, p250)、「動作主」(p117)、の民族名としてのラディル(p341)が、韓国版ではp489の巻末地圖の「 」が、抜けてゐる。

<sup>\*17</sup> 日本版第6章を例にとると、原註2, 4, 6は右片括弧註でも良ささうである。右片括弧註18と原註6の内容は似かよつてゐる。日本版第7章では原註3, 7, 12などは右片括弧註が良ささうである。

るか、いつそ韓国版のやうに全て一本化して通し番號にする(原著に存在する註かどうかは目立たぬ記號で示す)方法もあつたのではないか。

韓国版では原著と同じく一種類の註があるだけだが、原著と全く同じものではない。原著で引用直後に付されてゐるエピグラフの典據が新たに註として回されたものがあるほか、註末尾に「-」(譯者註)と示してある譯註が加はつてゐる。日本版と同じく註の位置は全て各章末に移されてゐる。本文括弧内に譯註が示されたものに、謝辭の「“diolch yn fawr!” ( ‘ ’ - )」(ウェールズ語で「ありがとうございます」-譯者註, [韓]p462)がある<sup>\*18</sup>。また、原註と同じ箇所に譯註を付す場合、同じ註の中に括弧内譯註を入れ込んでゐる。このやうな原註内の譯註は普通の註部分よりさらに活字のサイズが落としてある。日本版と同様、翻譯にかかつた労苦を譯註に見て取ることができる。例へば“the Popol Vuh” ([原]p2)には「」(ポポル・ブ)として譯註の中には説明に續いて「第9章参照」とある。“Lady Murasaki” ([原]p2)は「」(ムラサキ・シキブ)と正しく起こしてをり、譯註を付けて説明をしてゐる。譯註の印がない括弧書きでも韓国版獨用に情報を加へた部分がある。例へば「(’)」(テイトロ符號, [韓]p273)。韓国版の譯註は地理・歴史關係の情報が多いやうだ。

日本版にのみある内容を除いて勘定すると、日本版と韓国版の譯註の數は87:82で、ほぼ同じ程度の譯註を付けてゐることがわかる。原著と日韓兩譯書の註の數について附録Cにまとめた。日本版が最も註の數が多いが原著に比べて韓国版も相當に註を増やしてゐる。

### 3.8 エピグラフ

部、章、セクションの初めにはさまざまな言語からの文學作品、格言などの引用(以下エピグラフ)が添へられてゐる。原著では英語原作のものは一段組だがさうでない場合は二段組にして左に原語、右に英語を置いてゐる。典據の表示を含めてポイントが落とされてゐる。

日本版のエピグラフでは、英語原作のものには日本語譯のみが添へられてゐる。英語以外の言語からの引用の場合、二段組にして左に原語、右に日本語を置いてゐるものと原語と日本語を上下にならべたものもある。その基準は分からなかつた。エピグラフに付された右片括弧註には、翻譯に使つたり参照したりした譯書と参照頁などが詳しく載つてゐる場合がある。これも、日本版が多くの資料を使つて丁寧な作業をしたあかしであり、また讀者がそのあとを追へるやうになつてゐる。已むを得ず原著の英語から重譯をした場合もそのやうに記してある。本文内に情報を追加してゐる部分もある。場合により追加情報に

<sup>\*18</sup> 日本版にはここには譯註がない。



括弧を使つてゐる。“the Popol Vuh” ([原]p2) は「マヤの創造神話『ポポル・ヴフ』(第9章 327頁参照)」([日]p13) と前後に情報が加はつてゐる。

韓国版ではエピグラフが英語原作のものについては朝鮮語譯のみをのせ、英語以外の言語からの引用の場合、原語と英語譯および朝鮮語譯の三つが上下に順に示されてゐる。段組を使はないのは編集方針らしいが、三言語をならべるのは無駄に分量を増やしてゐるやうに見える。また、原著の英語からの重譯が多いと思はれる。この點は本評 §4.3 を参照されたい。

### 3.9 その他

翻譯版で本文の形式に手を入れてゐる場合がある。韓国版はカフカースの語族と言語の代表例を本文での羅列から表 7.1([韓]p280) にまとめ直し、本文で参照してゐる。日本版は p237 で原著では少し奇妙な語順の提示を文章化したり、p300 で原著では符號の付いてゐないリスト(複雑な物體、物質、單純な物體)に (a), (b), (c) と符號を付けてあとで参照したりしてゐる。どちらの例も、翻譯版において新たに編集上の工夫を凝らした部分である。日韓兩譯書における表記上の特徴については附録 A に添へた。

## 4 翻譯

ここでは本書に見られた翻譯上の工夫や困難について、固有名、動植物、重譯、「ことば」表現に關する翻譯の四つの觀點から檢證する。

### 4.1 固有名

英語で言及された固有名詞の表記を日本語表記にする際には相當に意を用ゐる必要がある。特に本書のやうに言語自體がテーマの本であれば、言語名には神經を使はざるを得ない。原著者はオーストラリア出身であるだけでなく、オーストラリアの原住民諸語を多く手がけてきた言語學者であり、一般によく知られてゐないオーストラリアの固有名詞が非常に多い。まづオーストラリアの諸言語の名前について日韓翻譯版をみてみよう。

日本で出版されたある本にオーストラリアの「ダーバル語」に言及してゐるものがあるが、この言語の名稱は本書日本版でいふやうに「ジルバル語」とするのが良い。韓国版では「<sup>Dyirbal</sup>」で、悪くないが dy が硬口蓋音であることを踏まへれば「」の方が正確だらう。日本版ではほかにも Kayardild という言語名を「カヤディルト語」、the Kaiadilt people を「カヤディルト語の話者たち」、Bugurniidja を「ブグニージャ」、Kunwinjku

を「クンウィンク語」、Lardil を「ラディル語」、Guugu Yimithirr を「グーグ＝イミディル語」としてをり、転寫は納得がゆく。

オーストラリア原住民諸語では舌頂音素が複数の調音點で區別される(齒音/齒莖音/硬口蓋音/反舌音)ことが多く、正書法では r が前置された記號は反り舌音、j や y が後置された記號は硬口蓋音、h が後置された記號は齒音の系列を表はすことが多い。また阻害音音素はほとんどの言語で有聲性による對立をもたず、摩擦音が音素的にないなど、調音法の對立が少ないことが多い。このやうな背景を踏まへて初めて固有名詞を正しく讀むことができ、また Kayardild と Kaiadilt が異綴の關係にあることなどが分かる。日本語の場合反り舌音や齒音であることを示す工夫は表記上できないが、例へばグーグ＝イミディル語の閉鎖音音素(有聲性の對立をもたない)の場合、代表音價は有聲音で示されることを踏まへて、有聲齒閉鎖音 th を「ダ行」で轉寫する配慮はできる。なほ、本書で言及されてゐないやうだが、オーストラリア原住民諸語では母音の長短が音韻的に對立するものが多い。

残念ながら韓國版ではこのやうな點を踏まへてゐない。「  
       」、  
       )、  
       )、  
       )」とあるが、綴りの都合である r, j を   
       、 としたり、無意味な有氣・無氣の對立を示す必要はなく、例へば「ガ  
       )、  
       )、  
       )、  
       )」とすべきだつたのではないか。この種のまづい例は韓國版に多めの印象を受けた。しかし、「ダーバル語」レベルの誤りは犯してゐないやうに見える \*19。

もちろん、個々の言語で異なる事情があるので、日本語翻譯にあつては、言語名の確認に三省堂の『言語学大辞典』などを参照したことは思ふが、上に略述したオーストラリア原住民諸語の音聲・音韻特徴は本書の中で紹介されてゐる(「言語学資料の表記について」や [原]p53, [日]p96, [韓]p124, p128) ので本書を丁寧に讀み解いた上で、調査をすれば判明した可能性がある。しかし、一般的にはもちろん、言語名の正しい名稱はそれぞれの地域、言語の専門家でないと難しい \*20

\*19 公平を期するために付け加へておくと、謝辭の中の以下の表現の譯出については韓國版が正しい。

- i. “Mayali, Gun-djeihmi, Kuninjku, and Kune dialects of Bininj Gun-Wok” ([原]p.ix)
- ii. 「マヤリ語、グン＝ジェツミ語、クニンク語、そしてニン・グン＝ウオク語のクネ方言群」 ([日]p.v)
- iii. 「  
       、  
       、  
       )」 (ニン・グン＝ウオク語の方言であるマヤリ語、グン＝ジェツミ語、クニンク語、そしてクネ語、[韓]p458)

これは、本書の譯者解題で原著者の代表的な著作に挙げられてゐる本のタイトル *Bininj Gun-wok: A Pan-Dialectal grammar of Mayali, Kunwinjku and Kune* (日本版参考文献の Evans (2003a)) にも明らかである。

\*20 日韓の違いについて気が付いたことを一點だけ加へておく。原著で Bengali/Bangla の二つの表記が使はれてゐる「ベンガル語」は、日本版では「ベンガル語」で統一してゐるが、「  
       Bangla」 ([韓]p189)、「  
       Bengali」 ([韓]p183) の二つの名前を使つてゐる。原著と同じく索引で相互に参照してゐるので意圖的に表現を使ひ分けたものと考へられる。「ベンガル語」や「  
       Bengali」といふ表現の方が英語訛りを日

その他、人名、言語名などの固有名は謝辞から目白押しである。日韓兩譯書の共通点がある。例へば、本文で言及された人名の愛稱は正式名に修正してゐる。“Mike Krauss” ([原]p.xix) は「マイケル・クラウス (Michael Krauss)」 ([日]p8)、 「Michael Krauss」 ([韓]p28) と日韓兩譯書ともに Mike を Michael に、“Bob Rankin” ([原]p110) も「ボブ・ランキン (Robert Rankin)」 ([日]p194)、 「Robert Rankin」 ([韓]p232) と Bob を Robert にしてゐる (後者は日本語の片假名表記が愛稱のまま)。しかし、愛稱を残してゐるものもある。例へば「アンディー・ポーリー (Andy Pawley)」 ([日]p.vi, p373)、 「Andy Pawley」 ([韓]p425) や、「ケン・ヘイル (Ken Hale)\*<sup>21</sup>」 ([日]p.vi)、 「Ken Hale」 ([韓]p390) である。評者にはその基準が分からなかつたが、上の例ではたまたまなのか、日韓兩譯書がともに愛稱をそのままに残してゐる。

人名の轉寫もたいへん難しい。特に、本書にはさまざまな言語の話者の名前が擧がつてをり、全てを調べ上げることはほぼ不可能である。しかし、翻譯にあつてはなんらかの決定をしなければいけない\*<sup>22</sup>。全體に、日本版では日本の人名を漢字に直してゐるし、場合によりそれ以上の手を加へた部分もあり、よく調べてある印象を受ける。韓國版も悪くないが、日本版に比べると少し疑問の生じるところが多めのやうに思ふ。固有名について氣付いたことを私見として本評末尾の附録 D に擧げておく\*<sup>23</sup>。

## 4.2 動植物

日本版は韓國版に比べ叮嚀に動植物の同定を行なつてゐる。まづ、譯註を見ると本書にたくさん現れる動植物名稱の同定にたいへん注意を拂つてゐることが分かる。日本版譯註の全體の約 1/3 が動植物關聯である。結局同定が難しかつたものもあるやうだが、多くは譯註に學名、和名を示して、さらに簡単な解説を付してゐる。韓國版は動植物同定の成果は譯語に反映させるだけのことが多いが、「キャヴェンディッシュ・バナナ」 ([日]p37, [韓]p62) の説明は韓國版の方が詳しい\*<sup>24</sup>。韓國版譯註は總數は日本版と大して變はらないが約 1/16 のみが動植物關聯であり、學名が記されてゐるものはない。

動植物關聯の語彙の同定に關する意氣込みの違ひのコントラストとして [韓]p68 に出て

---

本語/朝鮮語に採用するものだから、これは方針の問題である。

\*<sup>21</sup> 「ケン・ヘイル (Kenneth L. Hale 1934-2001)」 ([日]p341) と表記されてゐるところもある。

\*<sup>22</sup> 例へば「マギー・タクンバ (Maggie Tukumba)」 ([日]p112) と 「Maggie Tukumba」 (トゥクンバ, [韓]p147) は、どのやうな過程を経たか分からないが、兩譯書は異なる決断をしてゐる。

\*<sup>23</sup> 大角 (2013: 2, 註 2) に指摘されてゐるものは入れてゐない。

\*<sup>24</sup> [日]p46 譯註 8 になく、[韓]p70 註 33 のみにある情報としては、もともと主流だつたグロ・ミシェル種がパナマ病によつて 1960 年代に姿を消したこと、1980 年代に新型パナマ病が流行し現在主流のこの種まで絶滅が危惧されてゐることが記してあり、著者がバナナを取り上げた理由について導いてくれてゐる。

來た關聯する表現と [日]p42 の對應する譯などを示す。

- (1) a. 「tnyematye( )」(魔女幼蟲)、「tnyeme(witchetty bush)」(魔女藪)、  
「utnerrengatye」、「utnerrenge(emu bush)」(エミュ藪)  
b. 「tnyematye <ボクトウガの幼虫>」、「tnyeme」、「utnerrengatye <スズメガ科の幼虫>」、「utnerrenge」

韓國版は直譯しようとしてゐる。一般的には意味的な構成性のないはずの動植物名稱を直譯することに意味はない。ただし、これらの譯語が現はれた文脈では、ムパントウェ・アラダ語で「幼虫を、それが取れる茂みの木の名前にちなんで名づける」([日]p42) 動植物名稱の意味的構成性について述べられてゐる。そのため韓國版翻譯者の意圖はそこにあつたのかもしれない。それにしても、witchetty を witch の派生語のやうなものとして、また bush を灌木ではなく藪として譯してゐるところに英語の解釋上の誤りがあり、せつかく英語表記を添へてあつても二重三重の誤譯を重ねてゐると言つてよいやうに思はれる。日本版では上記に全て譯註が付いてをり、その全てに英語の表現と説明がある。このうち三つには學名が示されてゐる。執念のやうなものを感じる。

「鳥や木の絶滅危惧種であろうと、忘れ去られようとしている文化知識の体系であろうと、あるいは消滅の危機に瀕した言語であろうと、およそ多様性の維持を正當とする主張は、基本的に同じものである」([日]p37) といふ考へをしめした本書においては、日本版が動植物に對して獨特のこだわりをみせるのはとても重要な長所だと考へる。

### 4.3 重譯

英語以外の言語からの引用について、日本版はなるべく重譯を避けてゐる。翻譯が出版されてゐるもの場合は既存の譯を使用したり、第 2 部の冒頭など、翻譯者自身が通じてゐる言語の場合は英語以外でも直接翻譯したりしてゐる。韓國版はいくつかの例外(第 1 章冒頭のコーラン、p124 の聖書、p372 のポポル・ヅフなど)を除き、原著の英語のみを翻譯の對象としたやうである。

英語以外の外國語からの引用の扱ひについて、日本版と韓國版の違いを端的に示してゐるのは例へば第 8 章の冒頭の二つの引用である。日本と同じく翻譯大國である韓國では、出典となつた文獻はどちらも複数の譯書が出版されてゐる。

一點目はソシュールからの引用で、フランス語の “Prise en elle-même, la pensée est comme une nébuleuse où rien n’est nécessairement délimité.” ([原]p159) に添へられた日本語譯は「思想は、それだけ取ってみると、星雲のやうなものであつて、その中では必然的に区切られ

ているものは一つもない。」([日]p270)で定番の小林英夫より取つてゐるため當然表現はフランス語に近い。[韓]ではフランス語原文に加へ[原]の英譯“Without language, thought is a vague, uncharted nebula.”を添へた上で「

星雲  
。」(言語なしには、思考とは單に曖昧で目録化されてゐない星雲に過ぎない, [韓]p315)と譯してをり、佛英の冒頭の修飾句の違ひや直喩・陰喩の違ひをみても英譯からの重譯であることが明らかである。なほ「目録化」は朝鮮語としてあまり耳慣れない表現である。

日本版では、ヴィゴツキーからの引用“Мысль не выражается в слове но совершается в слове.”([原]p159)に添へられた日本語譯は柴田義松のもので、「思想はコトバで表現されるのではなく、コトバの中で遂行されるのである」([日]p270)だが、韓國版ではロシア語原文に加へ原著の英譯“Thought is not merely expressed in words; it comes into existence through them.”が添へられた上で「

。」(思考とは單に單語で表現されるものではなく、單語を通じて存在するものである, [韓]p315)としてをり、wordが「單語」になつてしまつたのはともかくとしても、「通じて」や「存在する」といふ表現は重譯の影響としか考へられない。

以上、重譯かどうか及ぼした翻譯結果について見たが、本書の場合、重譯が避けられない部分も多い。引用、そして提示された例文の出處となつた言語は歴大な數にのぼる。豪州原住民語からの譯に関しては、どちらにせよ原著者の英譯が信頼できるソースである。日本版にも重譯はかなりあるため、韓國版との違ひは相對的な比率の違ひといへる。韓國版では原著に含まれる他言語からの英譯を必ず提示してゐる。多用された英語の提示は、重譯の弊害を少しでも抑へるための仕組みなのかもしれない。しかし、讀者に示す英語があまり多くては翻譯をした意義が薄まつてしまふ。

#### 4.4 「言葉」に関する譯

原著者が本著で扱つた對象は言葉である。日本語の「言葉」は朝鮮語ではほとんどぴつたり「」に当たり、語彙、語單位・句單位・文單位・文章單位の表現、更にはシステムとしての言語まで含む概念だが、英語ではぴつたりの表現はない。「言葉」は語單位の表現のことは表はせるが言語學的に定義される形式單位としての語そのもののことは表はしにくい。逆に英語の word は、まさに形式單位としての語といふ意味に始まり、「語彙」、「表現」にわたる領域をカバーするが、システムとしての言語は基本的には含み得ず、別の意味的擴がりを見せる。形式單位としての語は日本語では「語」、朝鮮語では「」(單語)といふ。日本語の「語」は言語學者の用語であり、一般には「單語」といふものになると思は

れるが、「単語」は非専門家のことばだから、言語学的な厳密性はなく、「語彙」の意味でも用ゐられることがある。朝鮮語の「단어」(単語)は日本語の専門用語としての「語」の意味と一般語彙の「単語」の両方の意味をもつ。だいぶややこしい。ここでは、その「言葉」關聯の表現の譯をいくつか取り上げたい。

本書の英語原著の題は *Dying words*、副題は *Endangered languages and what they have to tell us* である。本書の原題が *Dying languages* ではなく *Dying words* であることについて、大角 (2013) は、本書で扱はれた失はれゆくものの具體例がシステムとしての「言語」ではなく個々の語彙であり言語事象であるからだ、とした。評者も大筋で同意するが、文學的表現の多い本書においては、副題が *dying words* のほとんど言ひ換へにあたる可能性があるやうに思ふ。Words が語彙、言語現象、そしてもしかすると言語システムまでを含めた象徴として使はれてゐる可能性である。

日本版は原題の表現構成を生かしながら、*endangered language* の譯語として定着してゐる「危機言語」を題とし、副題に「言語の消滅でわれわれは何を失うのか」とプロローグのある段落で使はれた表現 ([日]p7) を使つてゐる。結果として原著の副題の意譯になつてゐる。韓国版は (誰も知らぬ間に死す) とアリス・ボームのドラボン語の言葉「私は知らないうちに死ぬかもしれない」([日] 三章 p112、エピローグ p395) によつて題を付けてゐる。副題も 가 (消えゆく言語についての胸痛む探查報告書) といふ獨自のもので、原著の題にくらべ若干感傷的な印象を與へる。題名については兩譯書とも意圖的に直譯を取らなかつた。

6 章の節の一つ、“Words to Things: Matching Vocabularies to Archaeological Finds” ([原]p107) は「言葉から事物へ – 語彙を考古遺物に対応させる」(p[日]189)、「단어」 : 「단어」(単語と對象: 語彙と考古學發掘物のつながり, [韓]p227) と譯されてゐる。日本版は言語學者の好きな「ことば」ではなく「言葉」と表記してゐるのが一般の感覚に合ふ。「事物」のやうな硬いことばを使はず「言葉からものへ」としてもよかつたやうにも思ふが、特に問題はない。韓国版はあまりよくないやうに思ふ。朝鮮語の主見出しは日本版のやうに「단어」(言葉から事物へ) とするのが良いやうに思ふ。「단어」(単語) は、上に述べた通り、日本語の「語」と「単語」の両方でありえるが、words に比べるとその形式についての限定は強いので、避けた方がよい。また、things は「대상」(對象) のやうな抽象概念ではなく、かといつて「물, 물건, 부동산」(物、品物、物件) のやうな使ひでのない表現でもなく、「대상」(事物、もの) 程度の一般語彙である。

續きも興味ぶかい。“the German term *Wörter und Sachen* – literally “words and objects”” ([原]p107) は「ドイツ語で *Wörter und Sachen*、字義通りに譯せば、「語とモノ」」([日]p190)

「 Wörter und Sachen ‘ ’」(ドイツ語表現の Wörter und Sachen と稱するのだがそのまま翻譯すれば「単語と対象」,[韓]p228)と譯されてゐる。原著は英語なので、ドイツ語表現を直譯することができるが、日韓兩譯書は字義通りにそのまま翻譯することなどできない。難しいことは分かるが、日本版は words が「言葉」(前段落でみた)だつたり「語」だつたりしてあまり一貫性がない。この際「語」は譯語としてあまりよくないやうに思ふ。ここでは言語學でいふ形式單位としての「語」ではなくむしろ「語彙」のことを言つてゐるので、words と vocabularies とを譯し分けることを念頭におけば一般語彙の「言葉」が良いといふ考へ方である。朝鮮語は上の基準で「 」（言葉と事物)とするといいやうに思ふ。

プロローグの最後に出てくる“logosphere”は日本版で「言語圏」([日]p8) 韓国版で「logosphere」(単語界,[韓]p28)である。韓国版の表現は「単語」といふ表現がその意味を狭めてしまつてゐて、よくない。この用語は本書では頻出しないが、プロローグの締め括りに現はれることや第6章の題名に使はれてゐることからも、重要なキーワードである。

ところで、原著にも日韓兩譯書にも言及がないが、logosphere といふ語が初めて使はれたのは Krauss が2000年に京都で行なつた講演だと把握してゐる<sup>\*25</sup>。講演は後に邦譯され、そこで、この用語は「言語圏」(クラウス2002:192)と譯された。邦譯は譯者解題で言及されてをり([日]p439)、ここでの譯語選びにも直接の影響を與へたのではないか<sup>\*26</sup>。

クラウスはシステムとしての言語を生物に喩へて「言語多様性の生態系」としての言語圏について述べてゐるが、本書の原著者の定義は “[T]he logosphere is the whole vast realm of the world’s words, the languages that they build, and the links between them.”([原]p.xix)である。言語圏に生きる住人には words もあれば languages もをり、また、それらどうしの連關もゐるといふのだから、さまざまな抽象度の言葉が意圖的にごたませにされた世界はどちらかといふと學問的な世界ではなく文學的な世界のやうである。システムとしての言語は、難解な定義ではなく「言葉が構成する」ものと表現されてゐる。

ここで本書の原題の話にもどると、原著者が本著で扱つたのは *Dying words* の words は

<sup>\*25</sup> 講演の内容 (Krauss 2001: 30) に “[O]n the model of the term *biosphere* [...] I construct the term *logosphere* for the ecosystem of linguistic diversity that is the delicate environment of cultural and intellectual and linguistic diversity in which we have evolved and on which, I herewith claim, our survival as humanity utterly depends.” とある。

<sup>\*26</sup> もし邦譯文獻によつて譯語が選ばれたのなら、この日本版でよくするやうに、譯註をつけて紹介しておくのがよかつたのではないか。この譯語について大角(2013: 2, 註2)は「「言語圏」という訳は linguistic area(言語特徴を共有する地域)と混同される場合があるので注意が必要である」と指摘してゐる。「生物圏」に喩へて生み出された用語であるからには「言語圏」としかしようがないやうに思はれるし、日本語においては linguistic area はどちらかといふと「言語領域」、あるいは基本的に同じものを指すドイツ語の Sprachbund の直譯「言語連合」と呼ばれることが多いやうにも思ふ。

言語圏の住人の代表格として出て来たのではないだろうか。言語多様性と生物多様性を同様に大切なものと考へ、その論理も基本的に同じだと考へる原著者の發想であるから、評者はそのやうに理解した。先に原題とその副題が言ひ換への關係にある可能性を指摘したのは、そのためである。

## 5 原著と譯書の緊張關係

原理的に原著と譯書で齟齬せざるを得ない表現がある。例へば、原著に比べて非常に厚くなつた日韓兩譯書では、次の「この本」といふ直示表現に翻譯者が苦勞してゐる。

- (2) a. “This would have necessitated the slaughter of around 90 sheep for a single copy of the book you are holding in your hands.” ([原]p131)
- b. 「この本(原著(310頁))を羊皮紙で作ろうとすると約90頭の羊を殺さなければならぬのである」([日]p230)
- c. 「  
90  
。」(「文庫版の本一冊を筆寫するためにはどうしようもなく90頭程度の羊を屠殺しなければならなかつたのだ」,[韓]p269)

本書の場合は英語話者にとってエキゾチックな言語の例(日本語や朝鮮語を含む)が示されてゐるといふ特徴がある。そこで、すでに當の著者によつて指摘されてゐるやうに「英語に基づく観点と日本語に基づく観点の緊張關係によつて、このような本を日本語に翻譯するときには特別な困難が生じる」(日本語版序文,[日]p.i)。ここでは、翻譯されることにより原著で扱はれた問題がさらに掘り起こされたり、再考を迫られたりすること、そしてその曖昧性や誤りの再生産の問題について見てゆきたい。

### 5.1 翻譯から見える日韓の親族表現

本書の次の箇所はクンウィング語の親族名稱に關する紹介の一部である。

- (3) a. “Say grandmother Ann is talking with her granddaughter Valda about Mary, who is Ann’s daughter and Valda’s mother.” ([原]76)
- b. 「アンおばあさんが孫娘のヴァルダに、アンの娘でありヴァルダの母であるメアリーについて話しているとしよう」([日]p138)
- c. 「  
가  
가 .」



(アンといふおばあさんが孫娘のヴァルダとともに、自分の娘でありヴァルダの母親であるメアリーについて話してみると假定してみよう, [韓]p174)

日韓兩譯書はどちらも英譯にほぼ忠實に譯しあげてゐるが、韓國版の方が少し讀みやすいことに氣付く。まづ、日本版の二度目のアンは「自分」とか「おばあさん」の方が分かりやすい。親族をどう表現するかが主題になる部分なのでこのことに注意したい<sup>\*27</sup>。先の續き(同じ頁)を比べた上で、議論を進めたい。

- (4) a. “Ann would refer to Mary as *al-garrng* (“the one who is my daughter and your mother, you being my daughter’s daughter”), while Valda would refer to her as *al-doingu* (“the one who is your daughter and my mother, you being my mother’s mother”)
- b. 「アンはメアリーを *al-garrng* (「私の娘でありあなたの母親であつて、あなたは私の娘の娘である」) という語で言及し、ヴァルダはメアリーを *al-doingu* (「あなたの娘であり私の母親であつて、あなたは私の母親の母親である」) と言及する。」
- c. 「*al-garrng* (“  
*al-doingu* (“  
”)

(アンはメアリーを *al-garrng* (「私の娘でありかつお前の母親である人、あなたは私の娘の娘である存在」) と呼びヴァルダはメアリーを *al-doingu* (「あなたの娘でありかつ私の母親である人、あなたは私の母親の母親である存在」) と呼ぶ。)

ここの登場人物の名前は、原著においては關係を分かりやすく提示するための符號に過ぎなかつたのではないだらうか。ところが、日本版でも韓國版でも、アン、メアリー、ヴァルダといふ名前が前面に出て來ることによつて却つて關係の明解さが失はれてしまつたやうに感じる。このことは三人稱表現及び親族表現の特徴の、英語と日本語や朝鮮語との間の違ひによるのではないだらうか。つまり、日本語や朝鮮語では人を同定する際に固有名詞を一番の手がかりとせず、視點をある人物、普通は若い人物に定めてそこからの相對的な關係を利用すると言へないだらうか。また英語で “you being ...” と付加する表現は三つ目の視點を分けて明示したやうにも見えるが、構文上 *your* に關係節を添へられなかつただけかもしれない。さうすると朝鮮語譯のやうに「あなたは～である存在」は表現がしつこすぎる。例へば、次のやうに思ひ切つて言ひ換へてみよう。

<sup>\*27</sup> 加へて、このあとの文脈ではおばあさんが發言する場合とヴァルダが發言する場合の比較の話になるので、その意味でも「ヴァルダに」ではなく「ヴァルダと」とした韓國版が良ささうである。

(5) a. ヴァルダが母方のおばあさん(アン)と一緒に、ヴァルダのお母さん(メアリー)について話してゐるとしよう。おばあさん(アン)はヴァルダのお母さん(メアリー)を al-garrng(「私の娘の娘であるお前の母親であり、私にとっては娘にあたる人」といふ語で言及し、ヴァルダはお母さん(メアリー)を al-doingu(「私のお母さんであり、私のお母さんのお母さん(母方のおばあさん)であるあなたにとっては娘にあたる人」と言及する。

b. 가 ( ) , ( ) 가  
 . ( ) ( ) al-garrng (“  
 , ”) al-doingu (“  
 , ”) .

これが母語話者にとって通りの良い表現になつてゐるとならば、翻譯書に引つ掛かりながら讀む讀者に示された、原著の親族表現に關する問題の更なるひろがりとも言へる。

## 5.2 新しい言語相對論に關する問題

嚴密で客觀的な言語相對論はまだ發展途上にあると考へる。本書 8 章では英語と朝鮮語における placement-event の表現に關聯し、Bowerman と Choi が行なつた一連の研究について取り上げてゐるが、韓國版の譯書は奇しくもこの研究の分析の不充分さを露呈する結果になつたやうに思ふ。

Bowerman と Choi の主張<sup>\*28</sup>の要點は、英語の場合 put といふ「非常に包括的な意味をもっている」([日]p302) 動詞に in/on を添へて placement-event を範疇化するが、朝鮮語においては kkita 「はめる」と ppayta 「ぬく」のやうに「ぴったり合う感じ」([日]p302) を表はす語彙がありぴったりさによる範疇化がなされてゐる。そのことは心理實驗でも證明されるのださうで、朝鮮語話者は「ぴったり合つてゐるかどうかに常に注意を拂つてゐる」といふことになる。實驗では言語の媒介なしに刺戟を示したが、生後 1 歳 6 箇月の赤ん坊でさへ「自分の母語のもつ範疇に合わせて行動し始めていた」([日]p304)、といふ。本書のこの紹介は少し不用意であるやうに感じる。たしかに興味深い話ではあるが、それぞれの言語の體系性、その特徴を捉へた語彙の選擇をして實驗をデザインできてゐるのか、疑問を抱かざるをえないのである。言語と思考の關連性を示すことに成功した事例である

<sup>\*28</sup> この段落での Bowerman と Choi の主張は本評の對象である Evans (2010) に見られる研究の紹介を日本版に従つてまとめたものである。本評で主に参考にした Choi と Bowerman の論文(いずれも Choi が第一著者)についてはこの後の段落で示す。

本節では問題となる動詞の形式について主にイェール式のローマ字轉寫で示すことにする。

やうに思へない。

kkita は kkiwuta の縮約形で、韓国版ではわざわざ譯註をつけて「<sup>ママ</sup> 'kkita'」(原著で 'kkita' と提示されてゐるこの単語は 'kkiwuta' の縮約形である)としてゐる。翻譯者はなぜ kkiwuta でなく kkita の形式で提示してゐるのか少なからず疑問に思つたはずである。突き詰めてゆけばここにも大きな問題があると考へるが、以下の議論では kkita と kkiwuta の形式上の違ひは問はないことにする。氣になる向きには kkiwuta に讀み替へていただきたい。

元の研究は、Choi and Bowerman (1991) の分析に基づいてゐる。そこでは結合を表はす動詞、nehta 「入れる」と kkita 「はめる、差し込む」がぴつたりさ (tightness) による對立をなし、kkenayta 「取り出す」と ppayta 「抜く」がそれぞれ對應する逆意語 (分離を表はす動詞) と分析してゐるが、これはほとんど成り立たない。第一に、ppayta 「ぬく」の逆意語として母語話者がまづ思ひ浮かべるのはぴつたりさと關はらない nehta 「入れる」になると思はれる。nehessta ppayssta 「入れたり抜いたり」のやうな對が kkiessta ppayssta 「はめたり抜いたり」に比べて壓倒的に頻度が高いことはそのことを示してゐる。nehta 「入れる」が ppayta 「ぬく」の逆意語のひとつならぬから、ppayta 「ぬく」がぴつたりさと關はらない意味をもつのは明らかである。第二に、nehta と kkita は「ぴつたりさ」のやうな意義素による對立で辨別されるペアの語彙とは言へない。nehta 「入れる」は kkita 「はめる」と比べれば頻度からもカバーする意味領域からもずつと基本的な語彙である。nehta 「入れる」は「中の方向」といふ經路をもつ使役移動表現であるのに對し、kkita は「はめる」あるいは「差し込む」にあたる設置表現であり、どちらかでしか表はせない出來事もあるが、意味的に兩立する。このことは kkiw-e neh-ta(はめる-[連用] 入れる-[平紋])「はめ込む」のやうな複合語の存在からも明らかである。第三に、kkenayta と ppayta はぴつたりさに關係しない對立を示す場合がある。例へばかばんからものを取り出す際は一般的には kkenayta 「取り出す」を使ふが、外出の前に必要ない中身を取り除く目的ならば ppayta 「抜く」が使へる。すると「ぴつたりさ」といふ意義素があるとして、kkita といふさほど基本的とも思はれない一つの語彙がそれを持つてゐる可能性はあるが、この意義素が朝鮮語といふ言語を特徴付け、その核心的な意味體系に關はつてゐるといふ根據が示されたとはいへない。このやうな問題をはらんだ分析に基づいて、「ぴつたりさ」に注目して行はれたのが Choi, McDonough, Bowerman, and Mandler (1999) の實驗である。<sup>\*29</sup>。

<sup>\*29</sup> Choi and Bowerman (1991) も Choi et al. (1999) も『危機言語』で引用されてゐないので付言しておく、これら二點は引用されてしかるべきだつたやうに思ふ。まづ、二人がおそらく初めて共著したのが Choi and Bowerman (1991) であり、この論文にその後の一連の共著論文などの基盤になつたと考へられる語彙意味の分析が示されてゐる。また、本書で紹介された實驗は追跡調査を除けばみな Choi et al. (1999) に發表された

さて、面白いのは韓国版である。次は、実験者が *kkita* を使用される状況と考へるべきごとの本文での表現であるが、韓国版では *kkita* ではなく *nehta* 「入れる」を使つてゐる。

- (6) a. I can [...] put a peg in a hole. ([原]p176-177)  
b. 私は穴の中に丸釘を差し込むことができる ([日]p302)  
c. put a peg in a hole ([韓]p346)  
木釘を穴に入れる (*nehta*) こと

同様に次の原著 p177(Figure 8.12) 日本版 p303(圖 8.9) の圖に示されたうち次の二つの状況(繪と説明)も *kkita* のみが欲しかつたところであらう。

- (7) a. Put books in box-covers(本をカバーの中にぴったり入れる)  
b. Put pegs in holes(丸釘を穴の中にぴったり差し込む)

しかし、韓国版 p347 の圖 8.12 は、以下の通り、*nehta* と *kkita* を並べてゐる。

- (8) a. /  
本をボックスカバーに入れる (*nehta*)/差し込む (*kkita*)  
b. /  
木釘を穴に入れる (*nehta*)/差し込む (*kkita*)

また、次の (9) やうな状況でも *put on* とは異なる *kkita* を使つてもらひたかつたらうが、韓国版では (10) の通りである \*30。

- (9) a. Put rings on pole(リングを支柱にはめ込む)  
b. Put legos on another lego(レゴブロックを別のレゴブロックにはめ込む)

- (10) a. /  
輪を支柱にのせる (*encta*)/はめる (*kkita*)  
b. /

---

ものである。『危機言語』では Bowerman が單獨で行なつた口頭発表資料(評者未見)や Bowerman and Choi (2001) から圖(それぞれ [日]p303 と [日]p304) を取つてゐるが、これらのもとになつたのは 1999 年の論文である。實際、Bowerman and Choi (2001: 495) の、該當の圖にはキャプションに “Four pairs of scenes used to test comprehension of English *put in* and Korean *kkita* in Choi, McDonough, Mandler, & Bowerman (1999).” と示されてをり、繪柄は異なるものの全て Choi et al. (1999: 252) の圖と同趣旨である。

\*30 (8) や (10) に示した韓国版の翻譯は、英語からの翻譯の匂ひのするスタイルのやうに思はれる。例へば (10b) の (上) は英語の *on* の直譯ではないか。(10) で韓国版が *encta* と *kkita* を並べてゐるのも、英語の *put on* を参考にしたのかもしれないが、*encta* でははめる意味にはならない。

レゴブロックを別のレゴブロックの上に乗せる (encta)/はめる (kkita)

このように韓国版の翻譯の仕方は本書で紹介された實驗をデザインした人たちに都合の良いものではない。「ぴつたりさ」が朝鮮語の語彙體系において重要なキーになるのかどうか適切に示されなければ、心理實驗の結果が言語構造を反映してゐるとはいへないのではないか。この問題は翻譯が出るといふそのことで表現されてしまつたのである。

### 5.3 原著自體の問題

原文の書き方になんらかの問題があり、それが日韓兩譯書に引き繼がれてゐる場合がある。最初に、ク・ワル語とク・ワル語の歌物語に關する原著の曖昧性の問題、次に原著の誤植や原著者の誤解について取り上げる。

まづ、謝辭に“Alan Rumsey (Ku Waru, New Guinea Highlands chanted tales)” (p.x) とあるのは、コンマでつなぐのではなく、“and” でつなげば誤解が生じなかつたのではないか。日本版は取り違へて譯してゐる \*31。

同じくク・ワル語の歌物語に關する紹介をする文でその地理關係について“New Guinea”と“the Western Highlands Province”にしか言及してゐない部分 ([原]p195) があり、日韓兩譯書は「ニューギニア高地西部」 ([日]p333) 「 (西部高地地方, [韓]p378) と誤譯してゐる。ニューギニアは島の名前である。この島の西半分はインドネシア、東半分はパプア・ニューギニアである。ウエスタン・ハイランド州 (西高地州) はパプア・ニューギニアの州であり、行政区劃である。ニューギニア島全體から見ると、だいぶ東に位置してゐる。この地理關係を踏まへると、日韓兩譯書はともに問題があるが、この問題は“New Guinea”と“the Western Highlands Province”にしか言及してゐない原著に歸因する \*32。

また、この歌物語の歌ひ手の一人について原著で“another singer Koj (Paulus Konts)” (p196) と書かれた“Koj”と“Konts”は同じ名前の別のつづりと考へられる。ラムジーはク・ワル語の前鼻音化硬口蓋音素に j を使つてゐるのである (Merlan & Rumsey 1991: 323)。と

\*31 以下のやうに韓国版の方は良いが、日本版は誤譯してゐる。原著の曖昧な表現がその引き金になつてゐると思はれる。

- i. アラン・ラムジー [ニューギニア高地で歌われる物語ク・ワル] ([日]p.viii)
- ii. ( ; )  
(アラン・ラムジー (ク・ワル語; ニューギニア高地の口碑説話), [韓]p460)

\*32 日韓兩譯書のこの部分には別の問題もある。日本版では“sung tale”が一つのジャンルの名前として譯されてゐない。韓国版本文では“sung tale”が「口碑説話」と譯されてをり、口繪4の説明でも「 (口誦説話) としかなか、この文學ジャンルが歌であるのかどうか曖昧である。

ころが、日韓兩譯書は Koj と Konts に對して別の轉寫をあててゐる \*33。

最後にいくつか原著から譯書に引き繼がれた問題を指摘しておきたい。單純なミスにあたるのが“Saussure(1979:155)”([原]p159、[日]p270、[韓]p315)の例で、どのバージョンを見ても文獻一覽からもれてゐる。つまり、原著のミスを日韓兩譯書ともに引き繼いでゐる。ただし、日本版は右片括弧註1([日]p309)に小林英夫譯『一般言語學講義』の譯を使つた旨が記してある。それによつて、讀者は Saussure(1979)が英譯であることが想像できる。

誤植も見られる。第2部冒頭の Steintal からの引用の英譯 (Jespersen による)は、原著に誤植がある。韓國版は、その英譯を原文とともに示してをり、英語部分の誤植をそのまま繼承してしまつてゐる。その他、日本版は原著の誤植をいくつか直してゐるが \*34、第9章の一節のエピグラフ([原]p187、[日]p321、[韓]p364)のギリシア語には原著、日本版、韓國版の全てに誤植があるやうだ \*35。原著には誤植が四箇所ある。日本版は原著の誤植を全て訂正してゐるが、新たな誤植が一つある。韓國版は原著の誤植を二箇所訂正、二箇所引き繼いで、新たな誤植が二箇所あるので結局原著と同じく合計四箇所の誤植がある。

一般讀者に不親切な表現の繼承もある。「長く平らな」音組織([日]p96)といふ表現は、調音點が多いのに對して調音方法が少ない音組織、つまり一度話題にあげたオーストラリア原住民諸語によく見られる音組織を表はしてゐる。原著では“long flat”([原]p53)、「

long flat」(長く平らな、[韓]p124, 128)だが、調音點の區別を横にならべ調音方法の區別を縦にならべて子音音素を配列した表を作ると、標準的な言語に比べて横長の表ができることは、一般讀者には直ちに諒解できるものではない。

最後に、中國の韻文と音韻學に言及する段落([原]p186、[日]p319、[韓]p362)に關する問題を述べる。ここで原著者は中國における韻文一般(廣義の詩)と詞といふ特定の韻文形

\*33 それぞれ下記のように轉寫されてゐる。

i. 「コチ(Koj)、ないしパウルス・コンツ(Paulus Konts)という名の歌い手」([日]p335)

ii. 「 Koj( Paulus Konts)」([韓]p381)

これらは「コンツ(Koj)=パウルス・コンツ(Paulus Konts)」、「 Koj」とするのが良かった。

\*34 例へば Mutsumu Imai([原]p175、[韓]p343)は「今井むつみ」([日]p300)に、“tian ci”([原]p186)は「tián cí」([日]p319)に修正してゐる。後者の場合韓國版にはローマ字表現がなかつた。

\*35 本書に引用された部分を次に擧げる。原文は van Thiel (1991: 1)を参照した(下線、番號は評者)。日本語譯は土井晚翠(ホーマー 1943: 2)のものを添へておく。

i. πολλῶν δ' ἀνθρώπων ἴδεν ἄστεα καὶ νόον ἔγνω,  
πολλὰ δ' ὄ(1) γ' ἐν πόντῳ πάθεν ἄλγεα ὄν(2) κατὰ θυμόν,  
ἀρνύμενος(3) ἦν(4) τε ψυχὴν(5) καὶ νόστον(6) ἑταίρων(7).

ii. 旅を續けつ、諸の都城を眺め俗を知り、  
はた海洋の上にして夥の禍難凌ぎ去り、  
おのが生命又部下の歸郷の爲めにいそしみぬ。

原著の誤植は(2)、(4)、(5)、(7)、日本版の誤植は(3)、韓國版の誤植は(1)、(5)、(6)、(7)の部分にある。

式、そしてその曲調の名である詞牌を混同して紹介してをり、また韻書と韻圖も區別してゐないやうに見える。この部分について、日韓兩譯書ともそのまま翻譯しようとしてゐるので、ほとんど意味が通じない<sup>\*36</sup>。これは原著の問題であるとはいへ、本來この文化を共有してゐた日本や韓國でそのまま再生産されてしまつたことには寂しさを覚える。これも消えゆく言語文化に違ひない。

## 6 をはりに

エヴァンズの『危機言語』日本版について、韓國版と比較しながら所見を述べた。敢へて長短としてまとめると、日本版の長所は有意義な内容の追加、索引・註・相互参照の追加、典據の再確認と邦譯文獻の確認による情報追加、原著の誤りの訂正、動植物の同定など、サービス精神にある。短所は細かにすぎて分類がうまく機能しなかつた部分や、いくつかの新たに發生した誤りである。韓國版はスペースの使ひ方が贅澤なことが特徴で寫眞提示や本文デザインについてはそれが成功してゐるが、原語の添へ書きの重複などスペースの無駄遣ひに見える。その他の長所は安いこと、部分的な比較をすれば日本版にも勝る正確さや譯文のこなれが見えることがある。短所としては新たな誤りは多め、典據の再確認は少なめ、一般項目索引がないなどがある。

もともと翻譯書といふのは原書を手元に置いて読み始め、ごちない表現がでてくると原書を参照して理解する、といふ具合に利用する人も多いのではないかと思ふ。評者自身「こんなことなら原書の方がわかりやすいや」などとぼやきながら讀んだ部分がある。そんな風に讀み進めていけば、いくつもまづいところを指摘できる。だから、翻譯書にケチをつけるのは随分簡単なことである。しかし、翻譯者の精讀の跡を辿りながら譯書を讀むことで、原著者の考へや示された言語現象について理解が深まつた部分は非常に多い。

翻譯は解釋を一つに決めてゆく作業である。原著を讀むだけなら原著者のことばをその

---

<sup>\*36</sup> まづ、「詞」は「隋から唐にかけて民間に流布していたメロディつまり曲子にあてはめて歌われた、我が国における催馬楽・今様の類の歌謡であつたが、唐代に李白・韋応物・王建・白居易・劉禹錫などの詩人によつてとりあげられ[...] 晩唐から宋初にかけて曲子詞という一つの韻文学のジャンルとなつたものである」(長田 2000: 681)といふことを確認したい。日本版のみ例を挙げると、「中国の古典詩には、cí「詞」と呼ばれる 800 ほどのパターンがあることが知られている」([日]p319)はせめて「中国の古典詩である cí「詞」には 800 ほどのパターン(詞牌)があることが知られている」としないと通じない。そのやうに理解したとしても、韻書や韻圖が「詞」といふ韻文形式のためだけに編まれたはずはないので、次に示す後の文脈につながらない。「詩人が「詞」を使って詩を書くときの手引きである「韻図」こそが、初期中国語の音韻体系への、最良の洞察をもたらしたのである」([日]p319)には「初期中國語」とあるが、上古音の研究には「① 諧声文字, ②『詩經』その他先秦文獻の押韻の研究, ③ 仮借すなわち同義異文の研究の三つの方法」(長田 2001: 52)があるのであつて、韻圖では中古音より古くは辿れないのではないだらうか。この「韻圖(rhyme table)」を更に後の文脈で第 7 章の西夏語の韻書『同音』と關連付ける混同がある。

ままに受け止めてやり過ごすこともできることが、翻訳となるとさうはゆかない。翻訳といふ、解釋を一つに決める作業の結果、原著よりも表現の指し示す焦点がより定まつてゆくことが多い。それが、あるべき譯から大きく外れた部分は原著よりもくつきりと見えてしまふ。翻訳者はその危険を冒して翻訳するが、読者は安全地帯でその成果を横取りすることができる。読みにくい本を翻訳した日韓兩譯書の翻訳者に改めて贅辭を贈りたい。

本書の射程は相當に廣く、言語學の諸分野のみならず、歴史、文化社會、文學、人間の營みのありとあらゆる分野にわたつてをり、一年間の講義を一通り受講しをはつてなほ口がぼかんと開いたままの受講生といった體の評者の批評の能力を越えてゐる。このタイプの講義が細部において全てが正確ではありえないことも承知済みであるが、毎回出席してしまふ魅力をもつてゐる。日本版のあとがきは原著者が大雑把な性格であることに言及してゐる<sup>\*37</sup>。一方で、その最も専門とする言語に関する記述では、原著者は細部においても信頼すべきデータ・分析を示してきた。ディテールは學問的に重要な部分であり、しかも大局も學問的に重要であるといふ矛盾がある。そのバランスについて、評者も原著者を信頼する。今後は譯書を横に置いて何度も再讀したい。そのやうな精讀に値する本である。

日本はアイヌ語をはじめ、琉球諸語その他の危機言語、少數言語を抱へてをり、韓國にも濟州方言のやうな危機言語がある。省みればどのやうな言語の話者であつてもその言語のなんらかの方言の話者であるのが常態であつたのが、傳統的な方言の要素が薄まり「日本語」や「朝鮮語」といふ劃一的な特徴しか持たぬ大言語が伸張してゆく現代においては、危機言語の問題は誰にも無關ではありえない。だからこそ、原著は長く讀み繼がれるべき内容を持つてゐる。そして、早いうちに多くの讀者がつけば、原著、譯書ともに改版を重ねて更に良いものが世に出ることになるだらう<sup>\*38</sup>。評者は切にそのことを望むものである。

#### 参考文献

Bowerman, Melissa and Soonja Choi (2001) “16 Shaping meanings for language: Universal and language-specific in the acquisition of spatial semantic categories”. *Language acquisition and conceptual development*, 3, 475–511.

Choi, Soonja and Melissa Bowerman (1991) “Learning to express motion events in English and Korean: The influence of language-specific lexicalization patterns”. *Cognition*, 41 (1), 83–121.

---

<sup>\*37</sup> 「細かいことをあまり気にしないニックの性格がなせるワザか、元の原稿をあわてて削つたためなのか、意味が通らないところやいくつものミスが見つかった」 ([日]p477) とある。

<sup>\*38</sup> 本評執筆にあたりまとめた誤植疑ひの箇所については日本版の翻訳者にお送りする豫定である。



- Choi, Soonja, Laraine McDonough, Melissa Bowerman, and Jean M. Mandler (1999) “Early sensitivity to language-specific spatial categories in English and Korean”. *Cognitive Development*, 14 (2), 241–268.
- Evans, Nicholas (2010) *Dying words : endangered languages and what they have to tell us*. The language library. Wiley-Blackwell.
- Evans, Nicholas and Stephen C. Levinson (2009) “The myth of language universals: Language diversity and its importance for cognitive science”. *Behavioral and brain sciences*, 32, 429–492.
- Evans, Nicholas and Toshiki Osada (2005) “Mundari: The myth of a language without word classes”. *Linguistic Typology*, 9 (3), 351–390.
- Everett, Daniel Leonard (2009) *Don't sleep, there are snakes: Life and language in the Amazonian jungle*. Profile Books.
- エヴェレット・ダニエル・L (2012) 『ピダハン：「言語本能」を超える文化と世界観』。みすず書房。屋代通子訳。
- ホーマー (1943) 『オデュッセア』。富山房。土井晩翠譯。
- Kaplan, Lawrence (2003) “Inuit snow terms: How many and what does it mean?”. *Building Capacity in Arctic Societies: Dynamics and shifting perspectives. Proceedings from the 2nd IPSSAS Seminar. Iqaluit, Nunavut, Canada: May 26–June 6*, 249–255. Montreal: CIERRA. Facultés sciences sociales Université Laval.
- Krauss, Michael (2001) “Mass language extinction, and documentation: The race against time”. In Sakiyama, Osamu (Ed.), *Lectures on Endangered Languages : 2 – From Kyoto Conference 2000*, 19–39. ELPR.
- クラウド・マイケル (2002) 「言語の大量消滅と記録 – 時間との競争」. 宮岡伯人, 崎山理 (編), 『消滅の危機に瀕した世界の言語 – ことばと文化の多様性を守るために』, 170–206. 明石書店. 渡辺己・笹間史子監訳。
- Krupnik, Igor and Ludger Müller-Wille (2010) “Franz Boas and Inuktitut terminology for ice and snow: From the emergence of the field to the “Great Eskimo Vocabulary Hoax””. *SIKU: Knowing our ice*, 377–400. Springer.
- Martin, Laura (1986) “Eskimo words for snow: A case study in the genesis and decay of an anthropological example”. *American anthropologist*, 88 (2), 418–423.
- Merlan, Francesca and Alan Rumsey (1991) *Ku Waru*. Cambridge University Press.
- 宮岡伯人 (1987) 『エスキモー：極北の文化誌』。岩波書店。

- 長田夏樹 (2000) 「宋詞雅俗言助語辞雑験」. 『長田夏樹論述集 (上)』, 680–707. ナカニシヤ出版.
- 長田夏樹 (2001) 「上古中国語音韻体系瑣説」. 『長田夏樹論述集 (下)』, 52–58. ナカニシヤ出版.
- 大角翠 (2013) 「書評・紹介ニコラス・エヴァンズ著, 大西正幸, 長田俊樹, 森若葉訳 『危機言語: 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』」. 『言語研究』, 144, 119–127.
- Pinker, Steven (1994) *The language instinct: The new science of language and mind*. Penguin books. Penguin.
- ピンカー・スティーブン (1995a) 『言語を生み出す本能 (上)』. NHK ブックス. 日本放送出版協会. 椋田直子訳.
- ピンカー・スティーブン (1995b) 『言語を生み出す本能 (下)』. NHK ブックス. 日本放送出版協会. 椋田直子訳.
- Pullum, Geoffrey K (1989) “The great Eskimo vocabulary hoax”. *Natural Language & Linguistic Theory*, 7, 275–281.
- van Thiel, Helmut (1991) *Homeri Odyssea*. Hildesheim: Georg Olms Verlag.
- Tida, Syuntaro (2006) “La lingvo de la popolo Dom en Papuo-Novgvineo”. *La Revuo Orienta*, 1017, 22–23.
- Tsunoda, Tasaku (2006) *Language endangerment and language revitalization: An introduction*. Walter de Gruyter.

## 附録 A 補論: 日韓兩譯書の表記上の特徴

日韓兩譯書の文字遣ひの特徴を記しておく。だいたいにおいて、表記の工夫により音聲や語彙、意味を重ね合はせる効果について述べることになる。

### A.1 日本版の文字遣ひ

■片假名 日本版では *v* の轉寫に一貫して「ヴ」を使つてゐる。これは定着した習慣の一つだが、日本語の音素體系にない對立を、表記の上で示すものである。以下は定着してゐないやうに思はれる片假名表記を擧げる。

本文では小書きの *ŋ* が使はれてゐる。例へば「ウォラムルングンジの子孫たち」(第1章タイトル)、「ユールング」(p105)「故ドウガル・グンガラ」(p284)など、小書きの *ŋ* にガ行音が後續するのは音節初頭の軟口蓋鼻音を示すものである。「ŋガラカン語」(p141)のやう

に語頭に「ン」が使われたものもある。これらは「人名」以外の索引では小書きになつてゐない。一貫性に缺けるやうに見える。

「ク」のあとの小書きの「ア」、「イ」の例に、「トマス・アクィナス」(106)、「エモリー・セカクアプテワ」(p193)、「ナグアル」(238)、「アーネスト・ナクアユマ」(p273)がある。

「グン=ジェツミ語」や「チェツ・ウオン語」、「オッオダム語」では日本語の音韻構造に合はない促音が使はれてゐる。

以上のやうな表記は、原語の添へ書きほどの正確さはないが、日本語話者に理解される可能性の高い原語の音聲特徴を示すことを目標としてゐるものである。

■ルビ ルビはあまり多用されてゐないが、下記のやうなものが見付かつた。

- (11) a. 「躓く」(p98)、<sup>あいかた</sup>「相方」(p238)、<sup>う</sup>「填めていく」(p319)、<sup>むつ</sup>「睦み合い」(p325)、<sup>かんぼせ</sup>「顔」(p382)、<sup>おしろい</sup>「白粉」(p382)
- b. <sup>スピリット</sup>「精神」(p.ix)、<sup>ブルー・マッド・ベイ</sup>「青泥湾」(p19)、<sup>ローズ・リバー</sup>「バラ川」(p19)、<sup>インターコース</sup>「外との交流を求める精神」(p28)、<sup>アシユターディヤイー</sup>「『八つの章』」(p55)、<sup>グレイシャー・ベイ</sup>「氷河湾」(p70)、<sup>コルディヴァン</sup>「馬皮」(p78)、<sup>エ</sup>「わかつた!」<sup>レ</sup>「見つけた!」(p89)、<sup>メンタリーズ</sup>「心的言語」(p107, p270)、<sup>マッピング</sup>「関係付け」(p92, p114, p115, p120)、<sup>ワントーク</sup>「仲間<sup>\*39</sup>」(p272)、<sup>ディスクール</sup>「言説」(p276)、<sup>グスレ</sup>「一弦琴」(p324)
- c. <sup>エクシヤラ</sup>「不滅の字音」(p56)、<sup>ラディカル・ラングエジズ</sup>「根幹的言語」(p208)、<sup>レッド・メン</sup>「赤色人種」(p208)

以上で、日本版で使はれた大方のルビは拾つたと思ふ。(11c)は引用中のルビである。引用中のルビを除いても外來語(片假名)ルビが多いのが特徴である。

通常のルビ(11a)は同じ言語形式に二重の表記を同時に與へる二層複合表記である。表記上は主が漢字表記で従が假名だが、主従どちらも同じ言語形式を示してゐる。

外來語ルビ(11b)はこのやうな複合表記の主に日本語(必ずしも漢字のみからなるものではない)、従に外來語を据ゑるものである。スペースの節約につながりある種の文學的效果も産んでゐるが目立つ特殊表記なので多用できない。本書の外來語ルビの使用はそれなりに抑制的で納得がゆく範圍に収まる。聲に出して讀んでみれば分かるやうに、ルビの方が言語形式に對應し、主表記の部分は實は言ひ換へ・解説にあたる。例へば、ソシユールが英語から借用した *intercourse* を小林英夫は「インターコース」と譯してをり、本書日本版はこの譯語を採用しながら、おそらく英譯“*spirit of wider communication*”を参考にして「外との交流を求める精神」といふ解説を行なつてゐる。また、「<sup>マッピング</sup>関係付け」や「<sup>ワントーク</sup>仲間」は

\*39 評者は「ワントーク」ではなく「ワントク」とするのが良いと考へる。

索引項目としては「マッピング<sup>\*40</sup>」、「ワントーク」であり、譯者の意識においても主表記は解説である<sup>\*41</sup>。「<sup>グスレ</sup>一弦琴」は韓国版の対応部分では音轉寫で譯出した上譯註をつけてみる。この場合、ルビは(あるいはルビの下の解説は)、譯註を減らすのに貢献したのかもしれない。

■山括弧 語釋は鉤括弧で提示してあるものと山括弧で提示してあるものがある。

- (12) a. 「katabtu 「私は書いた」」(p52)、「-?wahpew 「(男性が)結婚する」」(p175)、「balla? datoka 「中国寺院」」(p231)、「tián cí 「填詞」」(p319)
- b. 「ミチフ語では「この少女」を awa la fij という」(p170) 「「目」のタンキック祖形\*kuwa」(p342)
- c. 「「神」や「キリスト」といった頻出する単語」(p233)
- (13) a. 「dilsiz 〈舌のない〉」(p78)、「this 〈これ〉」(p106)、「the waters of Babylon 〈バビロンの水(複数)〉」(p177)、「bàgò 〈手斧〉」(p192)、「ganethlia 〈誕生日〉」(p235)、「che 〈木〉」(p311)、「jitha 〈食べる〉」(p343)
- b. 「〈腕〉の語根 mawurr」(p26)、「〈私の妻〉は\*ni:wa」(p174)
- c. 「〈齒〉を表す名詞」(p173)
- d. 「〈私の妻〉?nahpew」(p175)、「fleurter(字義的には〈開花する〉)」(p152)
- e. 「wadar 〈水〉(英語 water)」(p147)

全體に山括弧の方が多い。上記 a, b, c は用法が同じであり使ひ分けははつきりしない。

■括弧書きの英語 専門用語、人名、場合により地名に原語が添へられるのは親切である。日本版では初出のところで括弧書きした英語・さまざまな原語を添へてある。また、原語の語形が議論に關する文脈などでも括弧書きがある。場合により原語は片假名の外來語表記になる。

- (14) a. 「適用 (applicative)」(p62)、「発話行為 (speech act)」(p128)
- b. 「ボガビラ (Bogabilla)」(p197)
- c. 「シムス=ウィリアムズ (Sims-Williamas)」(p197)

<sup>\*40</sup> 「<sup>マッピング</sup>関係付け」は原著で特定の意味のために用ゐられてをり、原著には索引項目にないが、日本版にはある。実際に評者も索引を使用した。その際氣付いたのだが、[日]p190 と p343 のみ片假名のみ表記で「マッピング」とある。この文脈だけ意味が違ふやうである。参照を外すべきかもしれない。

<sup>\*41</sup> しかし、このやうな重層的表記を出したのであれば、索引でも主表記に言及するやうな仕組みを設けてもよかつたのではないか。

- d. 「ビラボン (billabongs) とよばれる水のよどみ」 (p196)
- e. 「3行韻詩(テルツァ・リーマ)」 (p330)

のやうな例がある。上にみたローマ字の括弧書き添へは初出のところにのみだいたい行なつてゐるやうだが、「発話行為 (speech act)」についてはこのページだけで二度繰り替へされてをり、二度目の添へ書きは不要である。

その他、正確を期するための原語提示があるやうだが、方針は分からなかつた。

- (15) 「sòkà <植えつけ斧 (planting-ax)>」 (p192)、「ウリ類 (gourd)」 (p194)、「亜低木 (*iva annua*)」 (p195)

■**圈點** 原著でイタリック表記かつ言語形式自體のメタ言語的言及でない場合圈點付きにしてゐるやうだ。括弧書きを添へる例が多い。

- (16) a. 「分割統治」 ([日]p32)、「体系」 ([日]p161)、「雷神」 ([日]p162)、「改新に定義づけられた言語群」 ([日]p162)、「通時態」 ([日]p168)、「共時態」 ([日]p168)
- b. 「音を作る方法(調音法)」 ([日]p161)
- c. 「道程(path)」 ([日]p109)、「移動物(figure)」 ([日]p109)、「グルー(grue)」 ([日]p277)、「口承芸術(verbal art)」 ([日]p320)、「動詞アスペクト(verbal aspect)」 ([日]p326)

## A.2 韓国版の文字遣ひ

韓国版では外來語のための特別なハングルは現れない。これはごく普通のことであつて、日本語のやうに外來語のための特別な假名がありうる書記言語の方が若干特殊だと言へよう。<sup>\*42</sup> 本書には上付文字の添へ書きが見られる。ここでは主に添へ書きについて述べる。

■**上付の添へ書き** 韓国版では、漢字表記や原語提示のために上付の添へ書きを使つてゐる。原語の添へ書きは濫用されてゐる印象を受けた。

まづ漢字の添へ書きを見る。現在、韓國の多くの出版物では、漢字表記は補助的にしか使はれない。漢字を補助的に使ふ際は、時々ハングル表記の後に括弧書きで添へるのが一般的である。時に、括弧書きでなく小書きで添へ書きされる<sup>\*43</sup>。本書では上付の添へ書き

<sup>\*42</sup> ただし、朝鮮でも過去の言語學者の著作には外來語のための特別なハングルが使はれたことはあつた。いづれにせよ、現在は朝鮮語表記においては朝鮮語の形態音韻法に合はないうハングルは使はれない。

<sup>\*43</sup> 少ないが、逆に漢字を主にして小書きのハングルを添へたものがある。韓國語文教育研究會編 (2006) 『國漢混用論』( ) など、漢字の混ぜ書きを強く主張する書き手のものに限られるかもしれない。

を使つてみる。漢字の添へ書きの頻度は最近の出版物としては高い方だと言へるが、それは、これが翻譯書であるためではないかとも疑はれる\*44。ただ、漢字の添へ書きについて翻譯書ならでは内容的な特徴は見付けられなかつた。

漢字が混ぜ書きされる日本語ではむしろあまり意識されないことだが、朝鮮語のやうに漢字が添へ書きされてみるとその役割がよく分かる。口頭で發音された場合にただちに了解されがたいやうな文章語にグロス(形態素ごとの意味を主に別の言語の語彙で提示)を振るやうなものである。漢字一字は必ずハングル一字に当たるので形態素の對應は明確である。日本語のルビの関係と主従が逆轉してゐることに注意したい。添へ書きされた漢字の例をいくつか擧げる(ここでは必要な場合を除き日本語譯を省略する)。

- (17) a. 「億」(p139)、「神」(p273)、「縁」(p285)、「種」(p310)、「詞」(p362)、「體」(p362)、「富」(p393)、「故」(p431)「數」(p455)
- b. 「數的」(p86, p155)、「詩的」(p136, p313)、「物的」(p223)、「가音價」(p283)、「私的」(p434)
- c. 「音素」(p78)、「遭遇」(p86)、「抱合」(p87)、「邪教徒」(p87)、「記譜法」(p98)、「電子口蓋圖」(p101)、「手話」(p104)、「樹種」(p135)、「言明」(p138)、「題辭」(p138 他)、「屬名」(p156)、「種名」(p156)、「祖語」(p188)、「借用」(p188)、「移植」(p193)、「推移」(p199)、「整合性」(p209)、「低調」(p222)、「冶金」(p230)、「同系」(p231)、「硬度」(p233)、「交婚」(p243, p312)、「無人」(p244)、「先史」(p247)、「聖杯」(p250)、「가巫歌」(p254)、「聖書」(p257)、「州都」(p262)、「浮材」(p263)、「認知」(p312)、「가好事家」(p312)、「寫像」(p312)、「腺熱」(p321)、「斜滑降」(p356)、「脚韻」(p362)、「情事」(p395)、「가戀歌」(p395)、「曆書」(p396)、「招詞」(p396)、「寶庫」(p450)

漢字表記が添へられてゐるものには、同音異義が発生しやすい一音節の漢語や(17a)、「數的」、「詩的」のやうに綴りから發音が豫測できない(特定の漢語形態素で純粹に音韻的でない濃音化が起こる)もの(17b)、「」(思想、寫像、史上)、「」(祭祀、題辭)、「」(報告、寶庫)のやうに實際に同音異義語が存在するもの、そして「音素」、「抱合」のやうな専門用語の場合、また「」(電子口蓋圖)のやうにあまり一般的でない語彙の場合、があつた。そのやうなものは大まかにいへば、音聲言語で前提なしに用

\*44 少なくとも第一翻譯者は本來漢字を多用するタイプの書き手ではないやうである。例へば (1995) 『 - ・ 』( )には漢字は見當たらぬ。

みられると理解されづらいもの、といふ部類になるであらう。本書では漢字の添へ書きは多めなので上の例は網羅的ではない。形式的定義か可能な (17a) と (17b) のほかは無理に分類せず (17c) に入れた。

語の一部のみ漢字表記されたものに次のような例があり、漢字の添へ書きが複雑語の語構成を示すのに役立つてゐる。

- (18) 「カンガルー科」(カンガルー科, p134)、「グレビレア属」(グレビレア属, p156)、「大インド=ヨーロッパ語族」(大インド=ヨーロッパ語族, p183)、「フンボルト湾」(フンボルト湾, p210)、「母語」(母語, p226)、「母地域」(母地域, p226)、「亜赤道帯」(亜赤道帯, p228)、「救荒作物」(救荒作物, p232)、「原文化」(原文化, p298)、「舊世界」(舊世界, p373)、「廢媒体」(廢媒体, p439)

以上の通り、ハングルに漢字が添へ書きされたものは基本的に漢語表記だが、さうでないものに固有語に漢字が添へられたもの (19a) や日本語からの外來語 (19b) がある。

- (19) a. 「鳥」(p120)、「齒」(p213)  
b. 「松尾芭蕉」(p395)、「俳句」(p395)  
c. 「底引網」(p89)、「杜甫」(p361)

(19c) の杜甫は漢字音「杜甫」なのに対し (19b) の松尾芭蕉は漢字音「松尾芭蕉」ではなく、(19c) の底引網は漢字音「底引網」だが (19b) の俳句は漢字音「俳句」で現はれてゐない。つまり (19c) は字音で読まれる (17) の仲間であり、(19b) と異なる。

このやうに漢字はハングルと同じ内容を上付で添へ書きされたものがほとんどで、本書では獻辭の「故」のみがハングルなしに混ぜ書きされてゐた例外になりさうだ。

上付のローマ字は毎頁のやうに現れる。これは原著の表記を場合により提示するものである。まづ、人名、言語名など固有名である。

- (20) a. 「Noam Chomsky」(p23)、「Leonard Talmy」(p141)、「Soonja Choi」(p345)  
b. 「Mawn」(p26)、「Mundari」(p135)、「Pitjantjatjara」(p188)

人名の場合、韓国版は姓のみを示しフルネームは上付のローマ字で添へてゐる。この例外の一つは韓国人の名前である (20a)。もう一つは謝辭の部分で、謝辭ではフルネームをハングルに直してあり、ローマ字表記は添へられてゐない。言語名の場合、名前のあとに「語」を付けて、そのあとに英語名を上付で添へてゐる (20b)。

専門用語 (21a) や、原著の斜體表現 (21b) その他にも原語が添へられることがある。

- (21) a. 「 applicative 」(p87)、 「 approximant 」(p131)、 「 interdental 」(p131)、 「 lexeme 」(p133)、 「 agent 」(p144)、 「 patient 」(p144)、 「 mood 」(p144, p163)、 「 hearsay 」(p170) 「 Grimm's law 」(p199)、 「 daughter language 」(p217)、 「 documentary linguistics 」(p434)
- b. 「 Triple mapping problem 」(p120)、 「 notational variant 」(p140)、 「 mind-reading 」(p312)、 「 intention-attribution 」(p312)、 「 가 developmental plasticity 」(p312)

上の例にはよく定着した用語なども混ざつてをり、必要性がないものも多かつた。

言語表現の語釋(22a)や語釋相當の部分<sup>\*45</sup>(22b)に英語を添へ書きするものもある。

- (22) a. 「 \*ni:wa( my wife )」(p213)、 「 dosta( enough )」(p260)、 「 Korintha( / Corinth )」(p287)、 「 Ebra( Hebrews, Jews )」(p287)、 「 Epesa( / Ephesus )」(p287)、 「 jitha( eat )」(p392)
- b. 「 paternal aunt 」(p115)、 「 know 」(p115)、 「 ( )love 」(p115)、 「 gather 」(p135)、 「 oil 」(p263)

上の例に見られる添へ書きの意圖は、重譯による誤解を防ぎたいといふことなのかもしれないが、よく分からない。まづ、添へ書きがされた本體が語釋であることから全體としては表現が三重になつてゐる冗長さがあり<sup>\*46</sup>、また 「 bread 」(p182)や 「 last year 」(p334)、 「 가 ?where are you going 」(p323)のやうに讀み誤りやうがほとんどありえない表現になされた添へ書きや、 「

strike rub hold come ascend hold come descend do 」(p135)のやうに長い複合表現への添へ書きなどは度を越してゐないだらうか。

その他、これまでに出てこなかつたタイプのローマ字添へ書きを示す。

- (23) a. 「 Indigenous University of Mato Grosso, UNEMAT 」(p429)、 「 Gypsies, Roma 」(p227) 「 Popol Vuh; Book of the Mat 」(p371)、 「 Caucasus/Kavkaz 」(p50)
- b. 「 billabong 湖 」(p235)
- c. 「 多音的, polyphonic 」(p128)、 「 聖都, Holy City 」(p146)、 「 反轉化, retroflexion 」(p155)、 「 祖語, proto-language 」(p194)、 「 外因主義者, exogenist 」(p250)、 「

<sup>\*45</sup> 語釋相當とは、例へば 「知る」はカヤディルト語では形容詞であり、 ([日]p87)の「知る」の部分を目指す。

<sup>\*46</sup> 三重の表現が必要な場合があるにはある。例へば 「wadar( water )」(p183)のやうなものである。上の例では原著の “water” は語釋でありかつ同源語の例示(メタ言語的言及)なので、元の英語が二重の役割を負つてゐる。しかしこのやうな例以外は三重表現は冗長にみえる。



- 内因主義者, endogenist」(p250)、 「西夏, Xixia」(p267)、 「體, pattern」(p362)、  
「韻表, rhyme tables」(p362)、 「定型句, formulaic epithets」(p365)
- d. 「歸因, intention-attribution」(p164)
- e. 「再構 reconstructive techniques」(p184)、 「入社 initiation language」(p363)、  
「3 韻句法, terza rima」(p374)
- f. 「hiki<sup>ひき</sup>[四]」、 「wa<sup>わ</sup>[羽]」、 「soku<sup>そく</sup>[足]」、 「tsuu<sup>つう</sup>[通]」、 「satsu<sup>さつ</sup>[冊]」(以上 p342)
- g. 「shish kebab」(p133)、 「mapping」(p228)、 「wombat」(p235)、 「  
가 furigana」(p299)、 「Ontology」(p353)
- h. 「OKMA Oxlajuuj Keej Maya' Ajz'iib」(p430)、 「DoBes Dokumentation Bedrohter Sprachen」(p461)
- i. 「 / (RSPAS) Research School of Pacific and Asian Studies」(p461)
- j. 「 Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss  
man schweigen」(p38)、 「diuide et impera」(分割統治, p57)

上はそれぞれ、二種類のローマ字表現が添へ書きされてゐるもの (23a)、漢字とローマ字が両方示された場合 (23b, c)、漢字は一部の表記でローマ字は全體の原語表記であるもの (23d, e)、ローマ字による日本語轉寫を主に据ゑてかなと漢字を独自の方式で添へ書きするもの (23f)、外來語とその原語表記の関係にあるもの (23g)、頭文字語とその正式名稱の関係にあるもの (23h)、正式名稱の譯語に括弧書きの頭文字語と上付の原語正式名稱を添へるもの (23i)、英語以外の言語からの短めの引用の原語を添へ書きで示すもの (23j) である。

添へ書きが漢字とローマ字で揺れを見せる場合がある。「<sup>ママ</sup> 松尾芭蕉」(p395) と 「Basho」(p361)、 「俳句」(p395) と 「haiku」(p362)、 「音素」(p78) と 「phoneme」(p78)、 「祖語」(p188) と 「祖語, proto-language」(p194) などの例があり、また原著で triple mapping problem といふ際の mapping の譯語はどれも 「」(寫像) だが、添へ書きはあつたりなかつたり、その添へ書きもさまざまなパターンで出てくる。すなはち 「」(p148, p154)、 「寫像, mapping」(p146)、 「mapping」(p149)、 「寫像」(p312) の通り。あまり一貫した方針はもつてゐないのかもしれない。

### A.3 表記のまとめ

日本版は種々の形式の重層表記手段を用ゐてゐる。その手段の違いによりそれぞれの層のはたらきを区分けしてゐるが、その区分けの仕方に一貫性のないところもある。韓國版は形式的には上付の添へ書きを多用してさまざまな目的に使つてをり、それを括弧書きに入れ込んで三重の表現を重ねることも稀ではない。それぞれ翻譯の方針を反映してゐる。

研究者の人名に原語表記を加へることは専門書ではほとんど必須になるやうに思ふ。読者とその人物の研究を参照する際には原語表記を必要とする。また定着した譯語がない専門用語などにも原語表記が必要である。そのため表現を重ね込むことは専門書の翻譯にはどうしても避けられない部分があるが、それを多用するのは翻譯から逃げてゐるやうにも見える。また、本書が想定する讀者層を狭める可能性もある。韓國版の原語の添へ書きは初出のところのみならず何度も現はれる場合があり、表記の揺れからも一貫した方針がないやうに見える。

固有名は日韓兩譯書でそれぞれ方針があり、一貫した使ひ方があるが、専門用語の場合、日本版では複数の重層表記手段が使はれてゐる。韓國版では上付添へ書きの一種類だが、添へ書きはローマ字の場合と漢字の場合がある。對應を示すと「<sup>メンタリーズ</sup>心的言語」と「mentalese」、<sup>マッピング</sup>「関係付け」と「寫像, mapping」、<sup>適用 (applicative)</sup>「適用 (applicative)」と「<sup>applicative</sup> applicative」、<sup>3</sup>「行韻詩 (テルツァ・リーマ)」と「<sup>韻句法, terza rima</sup> 韻句法, terza rima」のやうな例があつた。

## 附録 B 口繪

	原著	日本版	韓國版
イエリニエ語の色彩語彙	(なし)	口繪 1、参照 p281	(なし)
カラーチップ圖版	(なし)	口繪 2、参照 p280	(なし)
Pat Gabori	Figure 0.1 (p.xvi)	口繪 3、参照 p2	口繪 1、圖 0.1 (p22)
Charlie Wardaga	Figure 0.2 (p.xvii)	口繪 4、参照 p4	口繪 2、圖 0.2 (p25)
Tim Mamitba	Figure 1.1 (p5)	口繪 5、参照 p19	口繪 3、圖 1.2 (p44)
Archi men	Figure 1.3 (p12)	口繪 6、参照 p26	圖 1.3 (p52)
Deaf attendant	Figure 2.6 (p43)	口繪 7、参照 p79	圖 2.6 (p107)
Antonio Asistente	Box 7.1 (p147)	口繪 8、参照 p251	コラム 7.1 (p296)
Paulus Konts	Figure 9.3 (p195)	圖 9.3 (p334)	口繪 4、圖 9.3 (p382)
working on Cup'ik	Figure 9.4 (p200)	口繪 9、参照 p338	圖 9.4 (p388)
Valentin Moreno	Box 10.2 (p213)	コラム 10.2 (p366)	口繪 5、コラム 10.2 (p416)
Sa speakers	Box 10.3 (p215)	口繪 10、参照 p368	コラム 10.3 (p420)
Maggie Tukumba	Figure 10.1 (p217)	圖 10.1 (p371)	口繪 6、圖 10.1 (p423)
Saem Majnep	Figure 10.2 (p218)	口繪 11、参照 p373	口繪 7、圖 10.2 (p426)

附録 C 原著と日韓兩譯書の註の數

片	右片括弧註	項目	註の總項目數
原	原註	内譯	原註内の入れ込み譯註
譯	譯註		(項目自體は増えない)

	原著	日本版				韓國版				
		計	片	原	譯	計	項目	譯	内譯	譯註計
謝辭	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0
プロローグ	6	12	2	4	6	7	7	0	0	0
第1部(冒頭)	2	4	3	1	0	5	5	3	0	3
第1章	30	58	25	12	21	45	45	11	0	11
第2章	29	58	28	13	17	61	61	25	0	25
第2部(冒頭)	3	8	7	1	0	8	8	2	0	2
第3章	25	37	17	12	8	31	29	5	2	7
第4章	17	17	11	5	1	21	20	2	1	3
第3部(冒頭)	1	3	2	0	1	5	5	2	0	2
第5章	22	37	11	18	8	33	32	5	1	6
第6章	29	43	20	14	9	37	35	2	2	4
第7章	31	46	5	32	9	43	41	6	2	8
第4部(冒頭)	4	7	5	2	0	6	6	0	0	0
第8章	26	46	29	15	2	37	36	1	1	2
第9章	42	66	40	19	7	57	55	3	2	5
第5部(冒頭)	1	2	1	1	0	2	2	0	0	0
第10章	43	55	31	19	5	49	49	4	0	4
エピローグ	4	5	3	2	0	5	5	0	0	0
言語学者に [...]		6	0	2	4					
訳者解題					9					
計	315	512	240	172	100	452	441	71	11	82

附録 D 日韓兩譯書における固有名の轉寫

原著	日本版	韓國版
Loughnane ([原]p.x)	ロスネイン ([日]p.vii, viii) → ロックネイン	([韓]p459, 460) →
Anna Wierzbicka ([原]p.ix)	アンナ・ヴェジビツカ ([日]p.vi) OK	([韓]p459) →
Robert Debski ([原]p.x)	ロバート・デブスキ/デブスキ ([日]p.vii/p222) → ロベルト・デンプスキ	([韓]p459) →
Kayardild ([原]p.xv)	カヤディルト語 ([日]p2) OK	([韓]p21) → 가
Kaiadilt ([原]p.xvii)	カヤディルト ([日]p4) OK	([韓]p21) → 가
Kunwinjku ([原]p.xvii)	クンウィンク語 ([日]p) OK	([韓]p26) →
Bugurniicja ([原]p7)	ブグニージャ ([日]p4) OK	([韓]p43) →
Archib ([原]p.12)	アーチブ ([日]p25) → アルチブ	([韓]p51) →
the Archi language ([原]p.12)	アルチ諸語 ([日]p25) → アルチ語	([韓]p51) →
Antonio de Nebrija ([原]p.31)	アントニオ・デ・ネブリジャ ([日]p61) → アントニオ・デ・ネブリハ	([韓]p85) OK
Lakhota ([原]p.39)	ラコタ語 ([日]p73) OK	([韓]p99) →
Guugu Yimithirr ([原]p.51)	グーグ=イミディル語 ([日]p94) OK	([韓]p123) →
Waamwang ([原]p113)	ワームアン語 ([日]p199) OK	([韓]p238) →
Papusza ([原]p125)	パプーシャ ([日]p215) OK	([韓]p256) →
Wajs ([原]p240)	ワイス ([日]p222) → ヴァイス (cf.[日]p215)	([韓]p256) OK
Tbilisi ([原]p142)	ツビリシ ([日]p245) → トビリシ	([韓]p287) OK
Basho ([原]p185)	芭蕉 ([日]p318) OK	松尾芭蕉([韓]p395) →

(ちだしゅんたらう、京都大學大學院文學研究科)